魔法の世界に来た犬

ユウスケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法の世界に来た犬

【Ｎコード】
Ｎ６９８７Ｓ

【作者名】
ユウスケ

【あらすじ】
ある日一人の青年が死んでしまう、しかし青年が死んだのは神のミスだった！
神はこのことを隠ぺいすため青年の了解を得ずに青年を自分好みに改造し異世界に飛ばした
これはそんな青年の物語・・・。
※注意！　この小説の作者は素人です　ご都合主義やオリ主最強などがあり
ときどき変なテンションになって無理やりな感じにしてしまう可能

性があります

プロローグ（前書き）

今回のこの小説は文章をすこしでも練習しようと思って書きました。
駄文ですのでご注意ください

プロローグ

ー神視点ー

わしは今日、現世で死ぬ予定の人間達の書類整理をしていた
ふふふ相変わらず秘書天使のマキちゃんはいいケツしとるの～。
わしはマキちゃんの尻を凝視する。
秘書天使とはわしのような神の仕事を補佐し助ける天使の事じゃ。
さて・・・今日もさらせてもらうかの。
わしは後ろからこっそり手を伸ばしマキちゃんお尻へ。
さあ、いくのじゃ！我がゴットフィンガーよ！！

ドゴ！

「はうっ！！」

「神様、パワハラです」

わしのゴッドフィンガーがお尻にとどく寸前にマキちゃんがわしの
後頭部を分厚い本で殴った
痛い！死んじゃう！！わし、死んじゃう！！！
痛みにもだえ机の上でごろごろ暴れていると・・・。

ビリ！

「ん？」

「へ？」

突然わしの腹のあたりで何かが破れるような音が聞こえた。
その音に反応するわしとマキちゃん。

「・・・破けたの」

「・・・破けましたね」

腹の下にあった書類を取り出してみる。
そしてその書衣類はみごと真っ二つに破れ修復が不可能な状態になってしまった。
なんとかならないかとマキちゃん書類を渡す。

「!?神様!その書類は・・・」

「ん?」

わしは破れてしまった書類をマキちゃんから受け取る。
やれやれ一体なんの・・・。

「・・・まずいの」

「・・・まずいですね」

「・・・これどうしよう」

「・・・どうしましょうか」

わしの持っている書類とは現世に生きる人間の命のようなもの。
この書類に明記されている寿命の日に、この書類を処分して死なせなければならない。

まあ、この仕事はわし以外の神もしてるが・・・。
そんな話はおいといて、問題はこの書類じゃ。
この書類が今日で死ぬ人間なら問題はなかったのじゃが・・・。
この書類に明記されている寿命は何十年も先であった。
もしこれが他の神にばれたら・・・。

「どうするんですか、神様！！私やっとこの職についたのにばれたら無職じゃないですか！！」

「お、落ち着くのじゃ！わしに考えがある！」

とりあえずこの青年の魂を他の神たちにばれないように改造し他の世界に飛ばせば
なんとかなる。
もし、ばれたりするとわしは地獄に落とされてしまうし、マキちゃんもわしがいなくなることで無職に
なってしまう。
しばらくお尻は控えよう。
そう心に決めた

一話　中二病の金髪少女

今日学校の帰りのことだ。突然心臓が痛み出し俺は意識を失ってしまった。
どれくらいたったのか俺は目を覚ました。
体を起こし辺りを見渡す。
はじめは視界がぼやけていたがだんだん見えるようになり、ここがどこかの森の
中だと理解した。
おかしい。俺は帰り道にいたはずだ何故俺は・・・。
俺はどうなったんだ？
町が近くにないか歩き出す。
体が重い・・・喉も渇く・・・。
ん？この音は・・・川か・・・。
俺は音がある方に歩き出した。
だんだん音に近づくが何も見えてこない。
どうゆうことだ？
俺はしばらく音を辿り歩き続ける。
見えた川だ
しかしどうゆうことだ？なんで俺はこんなに離れている川の音が聞こえたんだ？

「私は一体どうしたというのだ・・・！？どうゆうことだ口調がおかしい
本当に私はどうしたというのだ！！」

しばらく混乱していたが俺は落ち着きを取り戻し水を飲む。
しかし考えても考えても思い浮かばない。
あらゆる可能性を考慮したがわからない・・・。

とりあえず目標はここがどこか人に聞かないといけないという事だ。
俺はここがどこだか調べるため歩き出した。
しかしさっきの川で自分の格好には驚いたな、なんか身に覚えのない着物を着て
背中と腰をあわせ三本の刀があった。
まるで戦国時代の格好だな・・・。
ん？あれは・・・。
俺は森から出たはいいが、目の前には崖があり、近くに金髪の少女を見つけた。
よかった！これでここがどこか聞ける！！
俺は声を掛けようと歩き出すのだが・・・。
崖が崩れ少女は落ちてしまった。マズイ助けないと！
俺は走って少女の腕を取る。

「平気か？」

「・・・」

何も言わない少女よほど怖かったのか黙っている。
俺は少女を引き上げる。

「何故助けた？」

「助けるのに理由がいるのか？」

引き上げた後質問をしようと思っていたのだが先に少女が質問をしてきたので
答える。
しかし随分偉そうな子だな。もしかしてお金持ちの子供か？
まあ、俺もこの口調になって、かなり偉そうになっているけど・・・

。
しかし、質問をする前に年上に対する態度というものを教えてやらないとこの子の
将来が不安だ。

「そんなことよりも、お前は少し年上の者に対する態度を変えた方がいい。
初対面ならなおさらだ」

「!?・・・貴様、私の歳が、いくつかわかっていっているのか?」

俺が注意したとき一瞬驚いた顔をしたが、すぐに冷静な顔をして年齢がわかるのか質問をする少女。
もしかして俺が思っているより年齢が上だったのか?
たしかテレビに見た目二十歳の女性が実は四十歳なんてのがあったな・・・。
しかも、この子はどうみても外人さん。つまり十歳に見えて十歳じゃないということか?
しかし、それでもたぶん俺のほうが年上だろう。

「ああ、わかる。お前の年齢は見た目よりも上なのだろうが、どうみても私よりも歳が下だな」

「そうか・・・」

ん?なんかとげとげしていたのがなくなったようだ。
もしかして、わかってくれたのかな?
まあいいそれよりもここがどこだか聞かないと・・・。

「そんなk「おーい!あんたらちょっと町までの道が聞きたいんだ

がいいか！？」

俺が聞こうと喋っているときに後ろから男の声が聞こえて振り返る。
振り返ると、赤い髪の杖をもった男性が森から出てきた。
杖を見る限り登山客か？

「貴様！魔法使いか！！」

「ん？そうだが・・・もしかして譲ちゃんとその銀髪のヤツも魔法関係者か？」

いきなり少女が魔法使いと叫んだ後、男性が肯定する。
もしかしてこの少女は年齢が中学生ぐらいで、いわゆる中二病というやつなのでは？
それにしても男性も優しいな・・・わざわざ少女の遊びに付き合うなんて。

「私を殺しに来たか！返り討ちにしてくれる、チャチャゼロ！！」

「了解ダゼ！御主人！！」

どこから出したのか、少女は悪趣味な腹話術の人形を取り出し。一人芝居をして男性に突っ込もうとする。
まったく、この子は・・・。

「やめろ」

「何故止める！？」

「少し落ち着け」

「っく！貴様には借りがあるしな・・・」

「ツマンネー・・・」

俺が止めるとがっかりする少女と腹話術の人形。
本当に腹話術が上手だな。もしかしたら世界的に有名なマジシャンの娘なのかもしれないな・・・。
それにしても俺・・・なんか保護者みたいだな。

「すまないな。後でいっておくから勘弁して欲しい」

「いや、別になにもされてねーから気にすんな」

その後、俺たちは町に向かうため少女に案内をしてもらう事になった。

「あ、そういえばアンタ名前は？」

歩いている途中男性が俺に名前を聞いてきた。

「九条（くじょう）　仁（じん）だ」

「俺はナギ・スプリングフィールドだ」

お互いに紹介する俺とナギさん。

「そういえば譲ちゃんの名前を聞いてなかったな。何て名前なんだ？」

「私か、フフフフ私はエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル
賞金額６００万ドルにして、最強無敵の悪の魔法使いだ！」

「へえ、譲ちゃんがあの吸血鬼だったのか」

「・・・」

ナギさんが少女の名前を聞いたとき、少女は待ってましたと言わんばかりに宣言する。
エヴァンジェリンちゃん・・・まさか君がここまで中二病に汚染されているとは・・・。
そしてナギさんは出会った時のようにわざわざ話をあわせている。
しかしナギさん、吸血鬼ってなんですか？
もしかしてあなたもその歳で中二病？

「おい！もう少し反応したらどうだ！！」

「いや別に平気だし、なあ？」

「そうだな」

「アキラメロ。御主人」

反応が満足できなかったのか、怒るエヴァンジェリンちゃん。
しかしナギさん、俺にその話題を振らないで欲しい。
しかもちゃっかり腹話術の人形も会話に参加しているし。
それから町に着いて情報を集めた結果ここは外国であることが判明した。
外国のどこかって？現地の人がなに喋っているのかわからないし、
ナギさんに聞くのも

なんか恥ずかしいしエヴァンジェリンちゃんに聞くのは年上としてのプライドがズタズタに
なりそうだったからやめた。
その後宿でナギさんが日本に仕事をしに行くと聞いて
俺も日本に連れて行ってもらえないか相談したら一発でＯＫをもらえた。
しかしここで予想外の事が起きた。
この話をエヴァンジェリンちゃんに聞かれていたのだ。
エヴァンジェリンちゃんは俺たちについていくといくのだ。
俺は家族に了解をもらったらいいと言ったら、エヴァンジェリンちゃんは
少しわかるかわからない程度に表情が暗くなり家族はいないと言った。
俺はこの事をきいて一つの仮説を考えた。
もしかしたらマジシャンである彼女の父親と母親が亡くなり一人になって
彼女の家の財産目当ての親戚達に全てを奪われあの崖で一人自殺をしようとしていたのではないか。
そう考えると見た目十歳のこの中学生である少女があんな崖のところにいたのが理解できる。
俺はＯＫを出し自分の部屋で眠りに着いた。

一話　中二病の金髪少女（後書き）

ちなみにこの小説の主人公の肩にはあの謎のモコモコはありません

二話　気になる気持ち

ーエヴァンジェリン視点ー

私はいつものように行く当てのない旅をしていた。
ある崖の近くを通るとき急に崖が崩れて私の体が落下し始めた。
っく！私としたことが！！
不老不死の私がこの程度で死ぬわけがないのだが、自分の失態に腹が立つ。

「平気か？」

「・・・」

私が落ちるのを覚悟したとき、誰かに手を掴まれた。
そして、私の手を掴んでいる者を見ようと顔を上げる。
私の手を掴んでいたのは銀髪の美形と十人中十人が言いそうな男だった。
男は私の顔を見て無事か聞いてくる。
何故助ける？もしかして私の事を知らないのか？

「何故助けた？」

「助けるのに理由がいるのか？」

私は引き上げられた後、男に質問をした。
私は一応襲われても平気なようにチャチャゼロを出せるよう、準備する。
しかし、いくら目をつむっていたとはいえ私に接近を気づかせない

とはこの男かなりの実力者
なのかもしれないな。
だが、この男には殺気も敵意も強い魔力も感じない。
力を隠しているのか？

「そんなことよりもお前は少し年上の者に対する態度を変えた方がいい
初対面ならなおさらだ」

「！？・・・貴様、私の歳がいくつかわかっていっているのか？」

私が考えながら男を見ていると男が話しかけてきた。
一瞬、年上という言葉に驚いたがたぶんこいつは私を見た目と同じとしだと思っているのだろう。
もしそうならば魔法でトラウマをいやというほどうえつけてやろう
もし違ったとしたらコイツは・・・。
私は男に質問をした。

「ああ、わかるお前の年齢は見た目よりも上なのだろうがどうみても私よりも歳が下だな」

私はこの男の言葉で確定でないが一つの予想が頭をよぎった。
この男の態度や貫禄に目、おそらくだがこの男は私と同じか、もしくは私を超えた存在なのかもしれない
あくまで予想だが。

「そうか・・・」

私はコイツがどういう存在かわかないが何故か信用が出来ると感じていた。

不思議な感覚だ・・・コイツの近くにいると安心が出来る。
年上というのも本当なのかもしれないな。

「そんなk「おーい！あんたらちょっと町までの道が聞きたいんだがいいか！？」

目の前のコイツが喋り出したとき、森の中から赤い髪のバカそうな杖を持った男が大きな
声を出して近づいてくる。
なんだあの男の魔力は！
私は目の前に現れた男の魔力量に驚かされたが瞬時に戦闘態勢に入る。

「貴様！魔法使いか！！」

「ん？そうだが・・・もしかして譲ちゃんとその銀髪のヤツも魔法関係者か？」

私の質問にあっさりと答える赤い髪の男。
私はチャチャゼロを出して突撃をする。

「私を殺しに来たか！返り討ちにしてくれる、チャチャゼロ！！」

「了解ダゼ！御主人！！」

「やめろ」

「何故止める！？」

私が赤髪の男に突撃しようとしたとき目の前に近くにいたあいつの

手が私の行く手をさえぎった。
そしてうむも言わさぬ声を出す。
私は黙りそうになったが、プライドが折れないように声を出す。

「少し落ち着け」

「っく！貴様には借りがあるしな・・・」

「ツマンネー・・・」

私はコイツの言葉に従い言い訳をしながら戦闘態勢を解く。
ちっ違う！別にコイツが怖かったわけじゃない！私は悪の魔法使いだ、だから借りはかえさないといかん
から従ったのだ！！
ん？私が考え事をしている間にあいつらなにを話しているんだ？
もしかして私が考えている間にアイツが赤い髪の男を屈服させたのか？
それから私はこいつらを案内する事になり町に向かう。

「あ、そういえばアンタ名前は？」

赤い髪の男がアイツに名前を聞く。
そういえば名前を聞くのを忘れていたな。
赤い髪の男バカだと思っていたが案外役に立つではないか。

「九条（くじょう）　仁（じん）だ」

「俺はナギ・スプリングフィールドだ」

私は聞き耳を立てて聞いた。

なるほどあいつはジンというのか、しかし産まれは日本だとは・・・。
これで理解できたこの男は魔の存在で妖怪といわれるものだろう。
「そういえば譲ちゃんの名前を聞いてなかったな、何て名前なんだ？」
赤い髪・・・たしかナギだったか？が質問をしてきた。
しかしついに来たふふふ私の名を聞いて震え上がるがいい！！
「私か、フフフフ私はエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル賞金額６００万ドルにして、最強無敵の悪の魔法使いだ！」
「へえ、譲ちゃんがあの吸血鬼だったのか」
「・・・」
私が名乗りをあげたが反応したのはナギだけだった。
おい！ナギはどうでもいいが、ジン！！怖がらないのは嬉しいが、お前は私に興味がないのか！！
胸か！？やっぱり男は胸なのか！？
「おい！もう少し反応したらどうだ！！」
「いや別に平気だし、なあ？」
「そうだな」
「アキラメロ、御主人」

私は怖がっていないジンに嬉しいやら興味がなさそうな態度に悲しいやら
複雑な感情を抱え町に着き宿に泊まった。
そしてジンが辺りを回ると言い出し宿から外に出て行った。
まったくアイツは・・・。

「御主人、ジントカイウ銀髪ニ惚レタナ」

「ばっ、バカもん！そんなわけがあ、あ、あ、あるか！！」

「確実ニ惚レタナ・・・」

突然喋りだすチャチャゼロを近くの部屋にあるクローゼットの中に押し込み。
布団にもぐる。
顔が熱い私は・・・。
アイツの事を思い出す。
暖かかった・・・そっけなかったが誰かに怖がられず話したのは何百年ぶりだろうか。
そしてしばらくアイツの事を考える。
胸がドキドキするしかしいい気持ちだ・・・。
そうか私はアイツに惚れたんだな・・・そうと決まれば。
ジン私は悪の魔法使いだ！欲しいものはどんな手を使っても手に入れる。
お前は絶対私のものにしてみせる！！
私はそんな覚悟を決めた後、帰ってきたジンのところに行こうと歩き出す。
するとなにやらナギと話し込んでいる。
どうやらナギに付いていって日本に行くらしい。
私もすかさず話しに割り込み日本に同行する事になった。

二話　気になる気持ち（後書き）

文才が欲しいです・・・

チャチャゼロ　「ケケケケ、諦メロ」

三話　日本

ー仁視点ー

さて、俺たちは今日宿を出て空港に入り飛行機に乗って日本についたのだが・・・。
ナギ、あんたはいったい何者だ？
なぜこんな事を考えているかというと、ナギの言葉で俺やエヴァはパスポート
はいらないで飛行機に乗る事が出来たからだ。
ひょっとして相当な金持ちなのか？
ちなみに宿で話をしていたらエヴァにエヴァと呼べと言われた。
ナギのやつも話していたら仲良くなって今まで心の中ではさんづけだったが
呼び捨てにする事にした。
しかし話は変わるが俺の口はなんで人を呼び捨てにするんだ？
まあ、このことは考えていてもしょうがない。
なんか不思議な事に違和感が無くなってきたし・・・。
もしかしたら何かがそうさせているのか？

「おい、ジンどうかしたのか？」

「なんでもない」

「そうか」

エヴァが考え込んでいる俺を不思議に思ったのか聞いてくる。
それにしても遅いな、ナギのヤツ簡単な仕事と聞いていたのに何かあったのか？

「それにしてもあのバカはなにをやっているのだ！遅すぎるぞ！！」
我慢できなくなったのか叫びだすエヴァ。
まったく中学生とはいえ少しは我慢を・・・。
ん？そういえばエヴァ学校はどうしたんだろう？
もしかして俺とナギが勝手につれてきて今もしかしたら騒ぎになっているんじゃ・・・。
まずい！俺とナギ、誘拐犯じゃん！空港の監視カメラにも映っているだろうし
警察もきっと動くだろう、何か考えないと・・・。
そうだ！ナギは予想だがかなりの金持ちのはずだ、引き取って日本の学校に通わせるために
連れてきたとか適当な理由をならべて後は金でものをいわせば・・・。
ってなに考えてんだよ俺は！さすがに最低だろ！！でも今の俺は金も権力もない
ナギに頼むかやり方はナギに任せれば大丈夫だろ、
もしかしたらもうすでに動いているのかもしれないし。
それに学校をやめている可能性もあるからエヴァを学校に通わせてやりたい。

「おー、わるいなちょっと遅れた」

「わるい、じゃない！どんだけ待たせたと思っている貴様！！」

「うるせーなー、いいじゃねえかちょっとぐらい」

「一時間をちょっと、とは言わん！！」

ナギの声が聞こえたと思ったら何故か切れているエヴァなんだと思って二人の会話を聞いていたら
なるほど俺は考え事をしていて気づかなかったがどうやら一時間ほど経っていたようだ。

「たく、謝ったんだしいいじゃねぇか」

「あれを謝ったとはいわん！！」

二人の会話はエヴァがヒートアップしてナギがめんどくさそうに対応するだけ。
時間の無駄だな。
俺はさっきまで考えていた事をナギに話そうと口を開く。

「ナギ」

「なんだよ？まさかジンも俺に文句か？」

「違う少し話がある」

「話？別にいいが」

俺がナギに話を掛けた時、俺にも文句を言われると思ったのか嫌な顔をして対応するナギ。
そして話があると言ってナギを少し離れた所に連れて行く、もちろんエヴァには遠慮してもらった。

「で？話って何だ？」

「実は頼みがある」

「どんな？内容にもよるぜ？」

「実は、私はエヴァを学校に通わせたいと思っている」

「は？」

俺が話を始めて頼みごとの内容をいったらナギはアホな顔をして俺を見る。
まあ、いきなりだし当然だろう。
俺は呆けているナギを無視して話を続ける。

「エヴァは今までつらい思いをして来た、だから私はエヴァを学校に通わせてすこしでも
楽しい思い出を与えたいと思う」

「へ～・・・」

俺の話を聞いて感心したような顔をする。
まあ、確かに感心されてもおかしくない話だがここからが感心できなくなる。

「それでナギ、お前にエヴァの事を頼みたい」

「は？何で俺がそんなことを？お前がやればいいじゃん」

「俺がやると面倒な事になる」

「確かにそうかもな・・・わかった！俺に任せろジン！！」

「感謝する」

「いいって気にすんな！ちょうど心当たりがあるしな！」

俺が頼んだら俺の状況を察してくれたのか、引き受けてくれるナギ。
はあ、これでエヴァに学校を通わせてやれる事は出来るけど、俺これからどうしよう
一応エヴァの通う学校までは付いていくつもりだがその後が問題だ。
何故なら俺は一文無しで俺が俺である証拠の品もないから家族に頼る事も難しい。
それにここから自分の家の所まで行くのに交通費がいくらかかるか・・・。
まあ、うまくいったらエヴァの通うことになる学校で住み込みのアルバイトでもさせてもらうか。
そうして俺とナギはエヴァのいる場所に戻るのであった。
それにしも俺の持っている刀は何なんだ？初めて見たときは何もわからなかったのに
もう少ししたら思い出せそうな気がする・・・。
本当に不思議だ。

三話　日本（後書き）

今回短くてすみません！

※連休になったら他の小説も更新します。

四話　電車の中で

ーナギ視点ー

俺とジンは闇の福音の所に戻り、心当たりである麻帆良に現在電車で向かっている。
しかし・・・。

「すまないが、少し席を外す」

「なんだジン、トイレか？」

「ナギ、女の子の前でそんなことを言うな」

「おいおい、女の子って・・・まあ、お前から見たらそうか」

突然、立ち上がり席を外すといったジン、俺はトイレかと聞いたら闇の福音の前でそんな事を言うなと行ってスタスタと俺が喋っているのに行ってしまった。
まあ、別にいいが・・・。
それにしてもアイツ本当に魔族か？偉そうだけどかなり人間っぽいが・・・。
出会って数日に闇の福音に魔族の類でかなり強いと教えてもらったがあまり信じられないな。
しかしアイツ何歳だ？少なくとも闇の福音を女の子扱いするくらいの年齢だと・・・
８００歳か？
出会った時から魔力も気も何も感じないが、ここ最近は雰囲気が強

者の感じがする。
昔の俺だったら今頃ケンカを吹っかけて戦ってたんだろうけど、俺も成長したもんだな。
そんなことを考えながらふと、闇の福音を見る。
あらら・・・。

「・・・」

闇の福音は女の子扱いされたのが恥ずかしいのか真っ赤にしてうつむいている。
もしかして、俺が考え事をしている時からそのままだったのか？
しかし、これはもしかすると・・・。

「なあ、闇の福音」

「・・・なんだ？」

まだ、少し顔が赤いが話しかけたら反応した。

「お前ってさ、ジンの事が好きなのか？」

「き、貴様！いつ気が付いた！！」

俺の質問に顔がゆでだこのように赤くする闇の福音。
やっぱりか・・・。
少し前のアリカみたいだったからまさかと思ったが。

「まさかあの闇の福音がな～」

「わ、悪いか！　貴様！　もしこの事を回りに言って見ろ貴様を八

つ裂きにしてひき肉にしてくれる！！」

あ～あ、反応を見る限り、かなり本気だなこれは・・・。
俺は心の中でジンのこれからに同情しつつ闇の福音をなだめるのであった。
ジン・・・頼むから早く帰ってきてくれ。

ー仁視点ー

俺は電車に酔ったのか気持ちが悪くなり、トイレの近くまで来ていたのだが。
やばい、頭も痛くなってきてこれ以上歩けない。
俺は近くにある誰も座っていないイスに座る。
ああやばい・・・意識が・・・。

ー殺生丸・・・お前に守りたいものはあるか？ー

アンタ誰？殺生丸って俺のことか？
違う、俺は・・・九条　仁だ殺生丸じゃない・・・。
あれ？へんなおっさんが消えて俺が持っていた三本の刀が出てきた。
そうかこれは夢か・・・。

ー天生牙（てんせいが）ー
この刀、一振りで百の命を救い天を統べる

ー叢雲牙（そううんが）ー
この刀、一振りで百体もの亡者を蘇らせ地を統べる。

ー鉄砕牙（てっさいが）ー
この刀、一振りで百の妖怪をなぎ倒す人の守り刀、人界を統べる。

おっさん、声が響くどうやら刀の紹介をしてくれているようだ。
それよりも叢雲牙めっちゃ怖いな・・・亡者蘇らすなんて怖すぎ。
ー天の天生牙、地の叢雲牙、人の鉄砕牙の三本の剣を扱える者はこの世の覇者になれるー
へ～すごいな、でも俺は天下なんてとるつもりないんだけど・・・。
ーそして・・・思い出せ、おまえ自身の力を・・・ー
へ？待て待てたしかに俺この姿になってからかなりの強い感じになっているけど一般人だよ！
スーパー普通人なんだよ！？
ー思い出せ・・・ー
ギャーーー！頭いてーーーー！！！
夢の中のはずなのに頭に激痛が走り、俺は目を覚ます。
すると自分の体に関する情報や力加減その他諸々を理解した。
なるほど俺なんか凄い事になっていたんだな。
なんで俺、大妖怪になってんの？
でもこれでようやく自分自身の事が疑問に思わなくなってきたか分かった。
俺の精神はこの体になじみ始め、初めからこんなんだったと思うようになって来ているようだ。
はあ、もしかして俺はこの大妖怪に憑依しちゃった？
まあ、体となじんでも考え方は俺のままだって事が唯一の救いかな。
しかしこの体は本当にハイスペックなんだな、魔力も気も妖力もほ

ぼ無尽蔵で腕が吹き飛ぼうが
腹に穴が開こうが、ドラゴンなボールのアニメの緑の人みたいに再生が可能ってすごいな・・・
まさにチート、身体能力も半端ない走るだけで残像が出来るって凄いよね・・・。
本気で走ったらどうなるんだろう？
それから鼻と耳についてだが・・・なんだよ風に乗ってきた匂いで遠くの状況が解かるって！
どんだけ凄い鼻してんだよ！近くに臭い物があったらどうするんだよ！！
それに耳もだ数キロメートル先の声を聞き分けるって凄すぎだろ！！
どこのデビルなイヤー！？
それに妖力とか魔力とか気とか使うつもりがないときは誰も感じ取れないってどんなご都合主義！？
それからしばらく混乱していたが、何とか落ち着きを取り戻しナギたちのところに帰る。
いつかこうなった原因がわかるといいな・・・。

ー神視点ー

ふうこれでようやく一段落じゃわい。
まったく偽装工作というものがここまで疲れるとは・・・。
まあ、青年もわしの好きなキャラ、ナンバーワンの殺生丸になったんじゃから
文句ないじゃろ。
それに身体能力やそのほか諸々サービスして殺生丸を超えたチートにして世界最強の存在
にしてやったし叢雲牙も亡者を蘇らせないただ獄龍波をうてるだけの刀にした。
おかげであの世界でヤツにかなう存在はいなくなった。

まあ、青年が天下を取りたいとか野心が凄かったらその力を封印して刀を取り上げるつもりだったんじゃが。
あやつなら大丈夫じゃろそれにあの世界は力がないとかなり危ないしの・・・。
ま、後はしーらね。
そう思いながら近くにいた天使のナナちゃんの尻をなで全治３ヶ月の怪我をしました、丸！！

五話　入学

ー仁視点ー

俺はナギたちのところに戻った後、二人の様子が少し変だと気が付いた。
何かあったのか？
は！？まさか！！
ナギはロリコンでエヴァとイチャイチャでウフフな展開を・・・！？
くそ！このイケメンのリア充め！！
はあ、でもエヴァを任せたのは俺だし別にナギがロリコンでも我慢するか・・・。
それにしてもこの二人は本当に魔法使いだったんだな・・・。
二人からかなり強い魔力を感じ取りそんなことを考える。

ー麻帆良・・・麻帆良に後三分で着きます、お降りのお客様は忘れ物のなきようお帰りくださいー

「お、もうすぐだな・・・二人とももうすぐ降りるぞ」

「やっとか・・・」

「ああ」

ナギの言葉に反応するエヴァと俺。
それにしても魔法使いが電車ってどうかと思うぞ。
電車から降りた俺たちは麻帆良学園の学園長に会いに行くため歩き出す。
しばらく歩いたのだがまだ着かない本当に広いな・・・。

それにしてもこの土地には結界が張ってあるが俺は入っても大丈夫なのだろうか？
正直、戦闘にならないか不安だ。
「たしかこの近くなんだが・・・」
「おい・・・もしかして迷ったのではあるまいな？」
ナギの一言に怖い顔をしながら質問をするエヴァ。
おいおい、いくらナギがバカっぽいからってそんなことは・・・。
「・・・すまん」
「キサマー！！」
ナギの言葉に切れるエヴァ。
さすがにないと思ったがこいつは・・・。
二人はいつもの取っ組み合いをはじめて俺はそれを呆れながら見ている。
まったくこの二人は・・・。
さてそろそろ目立ってきたし止めるか。
俺が口を開こうとしたとき・・・。
「ナギ久しぶりじゃな、そこにいる二人が報告にあった闇の福音と九条　仁くんじゃな？」
「お、じじい！久しぶりだな！！」
「む？」

何かぬらりひょんが現れて話掛けてきて、二人は取っ組み合いをやめる。
なんだ？このぬらりひょんと随分親しげに話しているが知り合いなのか？
しかしこの学園ひょっとして妖怪の学校なのか？
エヴァも不審に思っているのかぬらりひょんを見る。

「いやいや、それにしてもこの子が闇に福音だとはとても信じられんわい」

「ほう、貴様その後頭部切り落とされたいようだな」

「フォ！？」

「おいおい、落ち着けって闇の福音」

ぬらりひょんの言葉が気に障ったのか殺気と魔力を出すエヴァ。
ナギが落ち着くように言うが全然殺気が収まらない。
おいおい、あいかわらず短気だな・・・。
しかたがない。

「落ち着け、エヴァ」

「む・・・お前がそういうのなら・・・命拾いしたな、じじい」

「ふ～、老人にこの殺気はつらいわい、それからありがとう九条君、助かったぞい」

「気にするな」

俺が落ち着くように言うと大人しく従うエヴァ。
ぬらりひょんは殺気がきつかったのか脂汗をかいきながらお礼を言ってくる。
それにしてもエヴァはもう少し俺以外の人間の言葉を聞いて欲しい、これから学校なのに大丈夫か？
少し不安になるが、これはエヴァの問題なので口にしないでおく。
俺が言っても大きなお世話だろうし。

「それじゃあ、早速二人の入学手続きをするかの？」

「「は？」」

ぬらりひょんの一言に俺とエヴァの声が重なる。
二人ってどういうことだ？
もしかしてナギか？いやさすがにないな・・・って事はもしかすると・・・

「何をしておるんじゃ、九条君にエヴァンジェリン君」

「聞いてないぞ！どういうことだ！！サウザントマスター！！」

「私も聞いていないぞ、どういうことだナギ」

ぬらりひょんの言葉で理解した、もう一人はまさかの俺だった。
反論するエヴァと俺、一体どういう事だ？

「いや～じじいがさ、エヴァンジェリンを入れる条件はジンも一緒に入れるって事だったんだよ」

「そうか」

なるほどそういうことか、ナギの言葉で俺は納得したのだが・・・。

「おい！入学とはどういうことだ！！私は聞いていないぞ」

初耳だと切れるエヴァ。

は？ナギのヤツもしかして話してなかったのか？

俺はナギに質問をする

「ナギ、どういうことだ」

「あ～実はよ言うの忘れてた」

「は～おぬしという男は・・・英雄になって少しは成長したと思っておったのにまるで進歩ないの」

「ぐ・・・」

「おい！私を無視するな！！」

俺が質問をすると正直に答えるナギ、その話を聞いていたぬらりひょんはかなり飽きている。

そこにエヴァが話しについていけないのかじたばた怒っている。

そこでぬらりひょんの口が開く。

「エヴァンジェリン君、実はのここにおる九条君が君に学校を通わせて欲しいとナギに頼んだのじゃ」

「は？どういうことだジン？」

俺の代わりに事情を話してくれるぬらりひょん、だがどうして俺がこうしたのか理解できないのか
質問をしてくるエヴァ。
俺はナギに言っようにエヴァにも言う。

ー事情説明中ー

話が終わった後、エヴァは顔を赤くして後ろを向きうつむいている。
あれ？もしかしてだめだった？
少ししてこちらに振り返るエヴァ。

「正直お前の気持ちは嬉しい・・・だが私は・・・」

「エヴァンジェリン君ちょっといいかの？」

「学校には・・・ってじじい、邪魔をするな！！」

「まあまあ、ちょっと話があるんじゃが結論を出すのはその後でもいいじゃろ」

「たしかにそうだが、くだらんことだったら殺すぞ」

「それでかまわんぞい、ではちょっとこっちに」

雰囲気的に断られると思ったのだがエヴァが最後まで喋る前にぬらりひょんが話しかけてきて
エヴァを連れて行った。
この場に残される俺とナギ。
どういうことだとナギに聞いても、ナギも知らないという。
しかたがないから待つことに・・・。

それから2分か3分ぐらい経ったころだろうか。
エヴァとぬらりひょんが帰ってきた。

「おい！ジン！さっさと入学届けを書きに行くぞ！！」

「あ・・・ああ」

「おいおい、どうなってんだじじい？」

「フォフォフォ、秘密じゃよ」

さっきまで断るつもりであったはずでろうエヴァが急に入る気になったようだ。
正直嬉しいのだがどうしたんだ？
俺は校内に入っていくエヴァに返事をしてナギはぬらりひょんに質問をするが教えてくれない。
まあ、どんな手を使ったかしらないけどエヴァが学校に通えるようになってよかった。
しかしこれは俺にもいいことなのかもしれない。
ここの高校を卒業できれば就職するときに、絶対に楽だ。
その後俺は高校の入学届けを記入して提出した。
これではれて俺も高校生となりエヴァも女子中学生となった。

六話　入学の裏話

ーエヴァ視点ー

今私とジンはじじいに森にいある使われていないログハウスに案内
され二人で部屋を分けて寝室のベッドに
寝転がっている。
何故一人ベットにいるかというと二人っきりになったとたん恥ずか
しくなり逃げてしまったかだ。
まったく今日は本当に散々だった。
サウザントマスターにはジンについてばれるし、女子中学生にされ
る。
挙句の果てにはぬらりひょんのようなじじいにもばれる。
まあ、ジンと二人で生活できるのは嬉しいが・・・。
一人で数時間前のことを思い出す。

ー数時間前ー

「それで、話とは何だじじい」

「まあ、入学について何じゃが入る気はないかの？」

私はじじいに話があるといわれ付いてきたのだが・・・このじじい
どういうつもりだ？
ナギに言った条件を思い出すとこのじじいは私とジンを利用するつ
もりだ。
だから私は申し訳ないと思いながらジンの申し出を断ろうと思った
のだ。

「ないな」

私はきっぱりと断った、もしこれ以上グダグダ言うのなら半殺しにしてやろうと思った。

「そうか残念じゃな、イヤならしかたがないの～」

ん？もっと食い下がってくると思ったのだがあっさり引いたようだ。まったくとんだ時間の無駄だ。

私はジンの元に戻るため歩き出した。

「せっかく、九条君と一緒に住めるチャンスかもしれんのに・・・」

じじいの放った一言で私の足は止まった。

このじじい、今なんていった・・・？

「じじい、どういうことだ？」

「フォ？何の事じゃ？もう終わった話じゃ、さっさと九条君のところに戻ろうではないか

それとも興味が出たか？」

「出た！出たから詳しく聞かせろじじい！！」

「フォフォフォ、そうせかすでないわい」

「話せ・・・」

「フォ！？わかった！！わかったから、その殺気はやめてくれんか！！」

私が説明を求めたら急に態度が偉そうになったので殺気を叩きつける。
するとじじいの顔は青くなり話そうとする。
まったく、いらん手間をかけさせるな。

「実はのう、君たち二人が入学してくれたら学園の敷地にあるログハウスに二人っきりで住んでもらおうとおもっとたんじゃ」

なるほど、たしかに魅力的な話だが。
私はこれからジンと日本を二人で旅をする予定なのだ。
それにもしかしたら旅先で・・・。
っていかんいかん少し妄想してしまった。
まったくこれが恋の病というやつか・・・厄介だがここちいい。
っと、感情に浸っている場合ではないな。

「残念だがじじい、私はこれからジンと二人で旅をする予定だ、だから別に住む程度など・・・」

「実はこの学園には男女の関係が急接近するイベントが沢山あるんじゃ」

「っく・・・旅の間にもそういったものはある・・・」

じじいが私に対するメリットを喋ってくる。
くそ！サウザントマスターめ！！喋ったな！！もどったらジンのいない所でひき肉にしてやる！！！

「しかし、賞金稼ぎに狙われたらせっかくのチャンスも無にかえる

ぞい」

た、確かに・・・あいつらはゴキブリのようにしつこいだから、雰囲気のいいところを邪魔される可能性が・・・いやしかしチャンスなどいくらでもあるのだ

このじじいに乗せられる事はない・・・。

「ぐ・・・な、なにチャンスなどいくらでも・・・」

そ、そう旅先ならいくらでも・・・。

「ここに居れば、賞金稼ぎにも狙われず学園以外はずっと一緒に居られるうえ九条君に料理を作ってあげたり新婚生活が出来るのではないか？」

し、新婚生活か悪くはな・・・って落ち着け私！耐えろ！耐えるんだ！

私は闇の福音で最強の魔法使いなんだぞこんなじじいの言葉に惑わされるな！！

「ぐぐぐ・・・」

「それに九条君もきっと喜ぶはずじゃ」

なんとか耐えたが、最後の言葉に私は・・・。

「いいだろう、入学してやる」

負けた。

「フォフォフォ、そうかそれじゃあこれ以上九条君たちを待たせるのはいかんからの
戻るとするかの」

しかしこのじじいは私達をどうするつもりだ？
まあ、どんな罠であろうと私とジンの二人ならここを一晩かけずに焦土に変えてやる。

ー現在のジン視点ー

明日から高校か・・・俺は前の学校を卒業しないでこっちに来たから。
また通えるようになって嬉しいな。
入学の手続きが終わった後ナギは実家に帰ると言い出して、そのまま帰ってしまったのだが
エヴァが殺気を漏らしながら、今度会ったら殺すと言ってとても怖かった。
それから制服や教科書の類を渡され、明日入学したら二人で学園長室に来て欲しいと言われた。
そして学園長に今は使っていないがちゃんと掃除をしたあるというログハウスに案内してもらった。
その後エヴァのやつも嬉しいのか部屋を決めたらさっさと自分の決められた寝室に行ってしまった。
さて、俺も寝るかな。
俺は部屋の電気を消して眠りに着いた。

七話　女の子は笑顔が一番

ージン視点ー

現在俺は、昨日言われた通り学校が終わってから学園長室に来ている。

「今日、来てもらったのは他でもない、実はおぬしらに頼みたい事があるんじゃ」

「やっぱりか・・・で何が目的だ内容によっては貴様をひき肉にしてやる」

「フォ！ちょ、ちょっと落ち着いてくれんか、その殺気は本当にきついんじゃわい！」

頼み事を口にするぬらりひょんだが内容を喋る前にエヴァが殺気を発する。

ぬらりひょんは顔を青くして汗をかいている。

そんなにきついのか？

俺はハイスペックな体のせいか、たいしたことないように感じる。

「エヴァ、殺気を抑えろ、話が聞けん」

「む・・・わかった」

「それで、話とは何だ」

俺がエヴァに殺気を抑えるようにいうと殺気はなくなり、俺はぬら

りひょんに質問をする。

「ごほん！実はの、お主らに学校の警備をしてほしいのじゃ」

「はぁ！？ふざけているのかじじい！！」

「いや、ふざけておらんよ・・・ただ人材が不足していて困っているんじゃ
それに、お金も出すし引き受けてくれんか？」

「いくらだ？」

「一人これくらいじゃな」

警備をしてほしいと聞いたときは俺もふざけるなと思ったがお金が出ると聞いて
いくら出るか聞いてみた。
するとぬらりひょんは一カ月分の給料の明細書のようなものを出して俺に見せた。
一・・・十・・・百・・・千・・・万・・・。
おいおい結構な大金じゃないか、サラリーマンの給料2ヵ月分ぐらいはある。
でも、それほど危険ということなんだよな・・・。
まあこのハイスペックな体があるし大丈夫だろ。

「いいだろう」

「おい！いいのか！？」

「私ならどんな敵が来ようと平気だ」

「たしかにそうかもしれんが・・・、わかった、私も引き受けよう、ただし、わかっているなじじい、私達にはむかってきたヤツは容赦しない
これだけは覚えておけ！！」

俺がＯＫを出したのが意外だったのか驚くエヴァ、いやさすがに学費をただにしてもらっているんだから
これぐらいはしないと・・・それに給料貰えるんだしいいことずくめなんじゃないのか？
もしかして敵が怖いのか？たしかに魔力量からみてもエヴァはナギよりも弱そうだし・・・。
それとも俺のことを心配してか？
それなら確かにしぶるのも理解が出来るな。
だから俺はエヴァにたとえ強い相手が来ようとも俺が居るから大丈夫てきな事を言うと
エヴァもＯＫを出し、なにやら警告する。
もしかして職場のいじめに関する話か？
たしかにありそうだ、まあその時はエヴァの言うとおり容赦しないかな。
エヴァの保護者として。
そうして俺とエヴァはログハウスに帰る。
それからしばらくの月日が流れた。
警備の仕事も順調なのだが周りのガングロ男達がうるさいので相手にしていない
何故相手にしないのかというと、つかかって来ても俺が手を下さずともエヴァが魔法でぶっ飛ばしている。
それにしても何であんなにつかかってくるんだ？
その他は平和で、俺は高校生活をエンジョイしているのだが・・・。

「お邪魔します」

「来たか・・・入れ」

今日、我が家にエヴァが警備でもよく見かけるタカミチという同級生の少年が来ると聞いていたが。
ついに！ついに！エヴァが友達を連れてきた！！
いやー嬉しいな！しばらくしても友達の話がまったくなかったから心配だったんだよ！
しかも男の子か～、もしかして友達ではなく恋人なのかな？
そうだったら、タカミチくんには今後ともよろしく言わないと。
いや～今日は実にめでたい！

「く、九条さんですよね？ナギから話は伺っています、これからよろしくお願いします」

「ああ」

俺はそれだけを言うと空気を読んでさっさと自分の部屋に帰った。
しかし、タカミチくんはナギの知り合いだったのか？
まあ、ぬらりひょんと知り合いだったんだしここで働くタカミチくんと
知り合いでも不思議じゃないか・・・。
しかし暇だな。
やることがない、こうなるんだったら外に出ていればよかったな。
今からでも遅くはないか？
いや、もし下のリビングでラブシーンが繰り広げられていたら気まずい。
しかたがない、窓から外に出るか・・・。
俺は今度使おうと思って買っておいた靴を箱から取り出し外に飛び

出す。
さてと夕方ぐらいには帰りますかな・・・。
少し辺りをふらふらしているとツインテールの少女を見つけた。
あんな小さい子がこんな森の中で何をしているんだ？
もしかしたら迷子なのかもしれないな。
俺は少女に話かけるため近づく。

「少女、どうかしたのか？」

「だれ？」

俺が話しかけて質問をしたのだが、逆に質問され返された。
それにしてもこの少女の目まるで何も感じない・・・。
もしかして、虐待か！！！
そうだ、もしかしたらこの子は今よりも小さい頃から虐待を受けていて
こんな目になったのでは！？
って！どんな昼ドラだよ！さすがにないだろ、落ち着け俺！！
ふ～落ち着いた。

「きいてる？」

「ああ、私は九条　仁だそれで少女こんなところでどうかしたのか？」

「私はアスナ・・・ここにいるのはガトウさんの頼みでタカミチを呼ぶため」

なるほど、この子はお使いで来たのか・・・でも本当に笑わないなアスナちゃんは・・・。

俺は、この子を笑わせてあげたくなった。

「アスナかいい名だな・・・」

少しキザかもしれないが自分の名前を褒められたんださすがに笑うと俺は思ったのだが

「・・・同じ」

「何がだ？」

「ナギと同じ事、言ってる」

「そうか」

アスナちゃんの言葉に驚く、ナギお前ってヤツはどんだけロリコンなんだ。

エヴァだけでなくこんな小さい子にまで・・・。

まあ、今はそんなことはどうでもいい、優先するのはアスナちゃんの笑顔だ。

「アスナ、好きなものはあるか？」

卑怯かもしれないが、プレゼントをして喜ばせようと考えた。

だが・・・。

「ない・・・私には好きなものも何も・・・」

アスナちゃんは本当にどんな生活をしているんだ？

俺はアスナちゃんの将来がとても不安になった。

しょうがないここは・・・。

「アスナ、今日から私とアスナは友人だ」

「友人？」

「そうだ、友人だ」

「なんで？」

俺の言った友人が理解できないのか質問してくるアスナちゃん。
俺は質問に答えたのだが、なんでか質問されてしまった。
俺は素直に答えようと口を開ける。

「アスナが気に入ったからだ」

「そう」

・・・一応友人として認めてもらえたのかな？
しかしこちらをじっと見てくるアスナちゃん。
おれ、なんかおかしいのか？
そうだ！
俺はアスナちゃんに少しここで待っているように言って、ある店屋に入る。
そして、目的の物を見つけて、アスナちゃんの所に帰ってきた。

「どこに行ってたの？」

「これを・・・」

「・・・？」

俺は包みを渡す。
アスナちゃんも贈り物と判断したのか包みを開けて入っていたものを見る。

「鈴？」

「そうだ、髪に着けるといい」

「・・・ありがと」

俺は昨日、女子達が話していた装飾屋に行ってきて一番似合いそうなものを買ってきたのだ。
そして、包みの中を見たアスナちゃんはほんの少しほんの少しだが笑った気がした。

「気にするな」

「あれ？アスナちゃんと九条さん！？どうしてここに居るんですか！？」

「あ、タカミチ」

俺が気にするなといってそろそろタカミチくんを予備に行こうかと考えていたときに
タイミングよくタカミチくんが現れた。
本当にいいタイミングだね、見てたのかい？

「では、九条さんアスナちゃんの事ありがとうございました」

「気にするな」

俺はタカミチくんにナギと同じロリコン認定されたであろうショックから。
気にするなと適当に言って自宅であるログハウスに帰った。
タカミチくん頼むからばらさないでくれよ、俺が社会的に死ぬことになる。
そんなことを考えながら自分の部屋で眠りにつく俺であった

八話　興味ないって言われるのつらいよね

ータカミチ視点ー

九条　仁さん、初めて会ったときは少し怖かったけどナギの話ではいい人らしい。
修行のため家にお邪魔したとき僕は勇気を出して挨拶をしました。
すると九条さんは一言返事をしてさっさと二階に上がっていってしまいます。
もしかして僕、嫌われている？
ダオラマ球内でエヴァンジェリンさんに話をすると。

「それは、あいつが興味を持たなかっただけだろ」

と、言われました。
他の魔法先生達のせいで印象がよくないとは思っていたけど、まさか興味がないなんて・・・

「まあ、私と不本意だがサウザントマスターは一発で普通に会話をしていたがな
ハーハッハッハ！」

え？それってもしかすると強い人とは話すけど弱い人とは話さないって事？
僕はショックのあまりガックリと膝を落として両手をつく。

「お、おい、まあ、そのなんだ、気にするな強くなれば問題ないだろ」

一応慰めてもらった後、修行が始まったのだが一言で表すと地獄だった。
満身創痍になって治療をしてもらい自宅に帰ろうと森を歩いていたらアスナちゃんがいた
僕はアスナちゃんに声を掛けようとしたのだが、九条さんが現れ何かの包みを渡した。
なんだろう？
そう思いながら見ていると。
アスナちゃんはたぶん贈り物であろう包みから鈴のようなものを取り出して・・・。
笑った、本当に少しだけ笑った。
僕やナギたちの前でさえ笑った事がないのに・・・。
そしてそれを見た九条さんも優しい雰囲気があった。
もしかして九条さんは優しい人なのかな？
そうだとしてなんで僕にはそっけない態度なんだろ？
そこで僕は理解した。
もしかして九条さんが僕の近くに居る事で僕に迷惑が掛かると思っているのではないのだろうか？
そしてその迷惑に対処できるだけの力を僕は持っていない、だからあんな態度をとってたんだ。
そうとわかったら早く帰って師匠に鍛えてもらわないと！！
僕は決意を胸にアスナちゃんたちのところに向かいます。

ーアスナ視点ー

私は今日、ガトウさんに頼まれタカミチを呼びにエヴァンジェリンが居るという
ログハウスに行って来てくれと、地図を渡され頼まれた。
私は地図を覚え目的地に向かう。

すると銀の髪の男性に何をしていると声を掛けられた。
私は、不思議な雰囲気を持つ男性が何者か気になって、思わず質問を質問でかえしてしまった。
男性は九条　仁という名前らしい。
私も名前を聞かれ名前を答える。
すると九条から、懐かしい言葉を聞いた。
そう、ナギと初めて会ったときに言われた言葉だ。
それから私は九条の友人になった。
友人にしたい理由も本当にナギみたいだ、でも・・・とても暖かくて何故か安心する・・・。
友人になった後、九条は・・・いや、ジンは私にここで待つように言ってどこかに行ってしまった。
それから数分ぐらい経ったころだろうか、ジンが包みを持って現れた。
そして、持っていた包みを私に渡してきた
贈り物だろうか？
私は包みを開けた。
中から出てきたのは鈴の髪飾り・・・。
私は、ジンに確認を取り、お礼を言った。
その時、私はドキドキして嬉しいという感情が膨らんでいた。
なんだろう、これ私・・・。
その後タカミチが現れて、ジンは帰ってしまった。
何故かとても寂しい気持ちになって、タカミチを睨む。

「ど、どうかしたの？アスナちゃん」

「しらない」

タカミチの質問に即答で答えてスタスタとガトウさんのところに帰る。

どうしたのだろう、タカミチは別に悪い事はしていない。
なのになんで怒っていたの？
わからない、私には・・・。
それからというもの、私は自分でも不思議なくらいに髪飾りの鈴を大事にしている。
この、感覚はいつか私に分かるのだろうか？

九話　イギリスに行きます

ー仁視点ー

タカミチくんが家に来るようになってまた月日が流れた。
だが、最近ちょっとタカミチくんがおかしい。
何故なら彼は１５もしくは１６歳のはずなのにもう２０代と言われても
おかしくない姿になっている。
もしかしてエヴァのせいでストレスを溜めているのかもしれない。
俺と普段いる時はなんだかんだ言って素直なのだが俺以外の人間にはどうも厳しい、
それはタカミチくんも変わらないのか？
もしくはタカミチくんだけが知っているエヴァの態度のせいなのか？
もし、タカミチくんにだけ対する態度があるならちょっと寂しいが
同時に同情の気持ちが
溢れ出てくる。
何故ならあれほど老け込んでしまうくらい苦労するのだ、きっとヤンデレか、あるいは
それに近いものなのか。
ともかく俺はタカミチくんを心の中でエールを送るのであった。
まあ、そんな話は置いといて、今日俺は高校を卒業した。
そして俺は麻帆良の大学に受かって進学する事も決定していた。
まあ、エヴァは高校には入らず警備のバイトを続けるらしい。
始めは俺と旅に行こうと言っていたのだが、入学したときみたいにぬらりひょんと話をした後には
ここに残りバイトを続けると意見を変えていた。
ぬらりひょん、まさか洗脳してないよな？
その後、俺は長い休みを利用して旅行に行く事にした。

正直、老け続けるタカミチくんを見るのはつらい。
何故ならエヴァの保護者は俺なのだ、だから少なからず俺も責任を感じてしまう。
うん、けして逃げるわけじゃないこれは少しでも俺の精神をリフレッシュさせるための
戦術的撤退なのだ。
だから、大丈夫のはず・・・だよね？
若干不安を抱えつつエヴァには置手紙をして旅行に行く。
何故言わないのか、それはもしかしたらエヴァがくっついて来る可能性があるからだ。
そうするとリフレッシュどころか、遊園地で疲れ、ベンチでぐったりしているパパさんに
なる可能性が大だからだ。
俺は荷物をまとめた後、気配を消して電車に乗り学園を出る。
まあ、大学が恥じまるのは４月の１６以降だ１ヶ月以上の余裕がある。
それにお金もかなりあるしいざとなったら貯金を使えば問題はないだろう。
さて、とりあえずイギリスにでも行きますかな！！
そして俺は空港に向かった。

ー数時間後ー

空港に着いた俺はイギリス行きの便を探すため歩き出した。
やっぱり春休みなどを利用する旅行客が多いのか沢山の人がいる。
そこで一人の人間が走ってくる気配がしたので避けようと思ったのだが人が多く避けられない。
だから俺は走ってくる人間が自分を避けてくれる事に期待し便を探し続ける。
だが走っている人間は俺の予想を裏切った・・・

「す、すみません！急いでいたもので、大丈夫ですか？」
そう、結局俺は走ってきた人とぶつかってしまったのだ。
まあ、俺は転ぶ事はなくぶつかった男性だけが転んだから別に平気だった。

「ああ」

「そうですか・・・それはよかった、あ、チケット落としてますよ」
男性は俺に謝罪した後、俺が落としてしまったであろうチケットを拾ってくれた。
その後男性と軽い雑談をして別れた俺は便を探す事にした。
それにしてもあの男性、戦場カメラマンだったのか・・・。
生きて帰ってこれるといいけど。
俺はチケットをスチュワーデスさんに見せて俺の乗る飛行機の場所を教えてもらった。
さあ、いざイギリスへ！！
俺は飛行機に乗り込み座席に座る。
さて、乗っている間は暇だし音楽でも聴きながら眠るかな。
俺は座席にあるヘッドフォンを取り付け眠りに着く。

『今回はアフガン行きの便に乗っていただき誠にありがとうございます、当便は・・・』

ーその頃日本ではー

ーエヴァ視点ー

「これはどういう事だ！！」

私は今、とても怒っている。
何故なら、いつも起こしにきてくれる仁がいないからだ。
始めは今日は休日だし来なくても不思議ではないと思っていたのだが
下の階に下りてみると置手紙があったのだ。
読んでみるとやつは用事があるからしばらく家を空けると書いてあ
ったのだ。
たしかにヤツ個人の事にあまり口を出すつもりもない、しかしだ
一言ぐらい言ってくれもいいんじゃなかろうか！！
おかげで今私は猛烈に機嫌が悪い。
そこで・・・

ガチャ

「エヴァ、今日も別荘を使わせ・・・失礼しました」

ちょうどタカミチが来たようだ、実にタイミングがいい私はストレ
スのはけぐちを見つけ
にやりと笑う。
しかし私の雰囲気がおかしいと気づいたのか逃げようとする。
だから私はヤツの襟首を掴み。

「待て」

といってやつの動きを止めた。
フフフフ、今日はいつもの三倍はつらいかも知れんな。
そんなことを考えながら地下までタカミチを引きずって行く。

「師匠ーーーーーたすけでーーーーーー！！！！」

叫ぶタカミチを無視して別荘に放り込む。
恨むなら、私を置いていった仁を恨むんだな。

その日、帰ってきたタカミチをみたアスナとガトウは・・・

「「だれ？」」

「タカミチです！！」

ボロボロになって顔の形が変わってしまった人物をタカミチと認めるのに時間が掛かったという
そしてこのやりとりが三度ほど続く事になるのはまた別の話。

九話　イギリスに行きます（後書き）

いつも読んでいただきまことにありがとうございます。
更新日ですが毎週土曜日もしくは日曜日になります。
課題があったり、テストがあると休みます。
これからも応援よろしくお願いします。

それと応援のメッセージなども受け付けておりますので
出来たらでいいのでそちらもおねがいします。

十話　家族が増えました

ー仁視点ー

さて、ついさっきイギリスに来た俺なんだけど・・・。
ここどこ？
俺は空港を出て、少しばかり歩いた後近くにあったベンチに座っている。
俺は持っていた旅行のパンフレットを見る。
パンフレットにはきれいな町並みの写真。
そして目の前を見る。
空爆を受けたのか、ボロボロになっている町並み・・・。
ちょっとまて、一体俺に何があった。
俺は飛行機に乗る数時間前を思い出しつつ原因を考える。
そして、戦場カメラマンのおじさんを思い出す。
そうか、もしかしたらあの時チケットが入れ替わってしまったようだ。
くそ！あの時気づいて置けばよかった！！
もっと確かめていればよかったと後悔をする。
だけど後悔ばかりしていられないとりあえず空港に戻って帰りの飛行機を・・・。

チュドーーーン！！

は？
俺が空港に戻ろうとしたとき空港の方で爆発音が聞こえた。
これってもしかすると・・・。
俺は空港に急いで戻った。
すると空港の出入り口が爆破されたのかめちゃくちゃになっている。

あれ？これってかなりまずいんじゃね？
とりあえず中に入ってみる。
しかし、中のほうは思ったより被害が少ないようだ。
怪我した人もちらほら見かけるがかすり傷や軽いやけどを負った人がいるくらいだ。
その後俺は空港の人になんとか日本に帰れないかと聞いたら。
一週間後にくるからそれまで待っていて欲しいといわれてしまった。
正直一週間無事で居られるか不安だ。
いくら俺がチートボディでもさすがに銃弾や爆弾にやられたらひとたまりもないだろう。
俺はしかたがないので一週間の滞在を覚悟してどこか安全な場所を探し始めた。
だが、周りのホテルは観光客を襲う連中がいると聞いたので遠くにあるという安全な地域に移動する事にした。
まあ、俺のチートボディなら遠くに行ってもすぐに戻れるだろうしさっさと安全な地域に移動しよう。
俺は荷物をもって走り始めた。

しばらく走った俺は不思議な臭いと魔法の気配を感じていた。
あまり関わらない方がいいと思ったが町で嗅いだ煙や火薬の臭いもするので
気になった、立ち止まりもう一度臭いを嗅ぐ、人の臭いはあまりしない。
これなら大丈夫か？
俺は臭いの方向に向かって走り出した。
すると町が見えてきた、煙も上がっているしかし変なものが見えた。
それはコウモリのような翼を生やし、人以上の大きさをもつ生物だった。
何アレ！？どこかのバイオ生物！？宇宙人！！？
俺は立ち止まり驚愕した。

麻帆良に居たときは鬼とか魔法使いは見てきたけどさすがにあんな生物は見た事がない。
そんな時に声が聞こえた・・・。

ー助けて!!ー

ー誰かーー!!ー

ーいやだ!死にたくな・・・!!ー

たぶん町の人たちの声だろう。
俺は・・・。
俺は走り出した、そして町に着いた。
周りを見渡す、とても嫌なにおいがした臭いの元は死体とても気分が悪い。
俺は生き残った人を探すため臭いを嗅ぎながら走った。
近い、生きた人のとバイオ生物の臭いがする!
俺は臭いの元の人物を見つけた。
だが、居たのは黒く長い髪で褐色の肌をしている少女だけだった。
バイオ生物の臭いがするのだがその臭いの元は少女からだ、しかし人の臭いもする。
もしかして襲われたが奇跡的に逃げのびたのか?
何時までもしゃべらない俺が気になったのか少女はこっちをじっと見てくる。
ただ見られているだけなのに、なんか違和感を感じた・・・。
まるで俺の中をみようとするそんな感じに。
少女は顔を青くして目をつむった。
もしかして俺なんか怖がらせた?
ここでのんびりしているわけにもいかないのでとりあえず少女のそばにいく。

俺の足跡で近づくのがわかったのかびくっと肩を震わせる。
もしかして俺って怖がられてる？
まあ、確かにこんな状況だし知らない男が現れて近づいてきたら誰でも怖いよな
しかも子供ならなおさらだ。
何とか説得してここから連れ出すか・・・。
俺は少女に一歩また一歩と近づく。
するとバイオ生物と思われる臭いが近づいてきた。
俺は急いで少女を抱え近くに飛ぶ。

ドン！

飛んだあと、バイオ生物がさっきまで少女がいた場所に突撃をかましてきて砂煙が上がる。
危ねー！あんなんぶつかったら死ぬぞ！！

「なんで・・・」

「ん？」

「なんで助けたんだい？」

またか・・・俺は毎回助けた少女に聞かれているような気がする。
まあ、別にいいけど。

「助けたいと思ったからだ」

「・・・そう」

俺が答えると一言喋って黙ってしまった。

すると土煙からバイオ生物が姿を現した。

『貴様、何者だ？』

おお！いきなり喋ったもんだからびっくりしたよ。
ていうか喋る事ができたんだね。

『答えないか・・・まあいいその少女を渡してもらおうか』

はて、どういうことだろうか？
もしかしてこの少女のバイオ生物の実験体なのではないだろうか。
そう考えるとこの状況も理解できる。
この子は人間とバイオ生物の実験で生まれた存在で施設から逃げ出し
この町に来たそして、この子を連れ戻すように言われてきたのがこ
いつ等と・・・。
まさかね・・・さすがにそんなＳＦ映画みたいな事ありえんだろ。
俺は考えを振り払い俺は答える。

「断る」

『ほう、ならば死ぬがいい！！』

俺が断った後、バイオ生物は俺に突っ込んできた。
さっきのを思い出す。
あれ？俺死んだ？
バイオ生物は近づいてきて俺を殴ろうと拳を突き出す。
ん？なんで俺コイツの動きが見えんの？
そう、俺はコイツの動きが手に取るように解かる。
さすがチートだな。
近づく拳、受けようかと思ったが面倒になり指先に魔力を込めて光

のムチを作り
敵を真っ二つにした。

『がっ！！』

真っ二つになったバイオ生物はその場で倒れさらさらと消えていく。
もしかして死んだら砂か何かになって証拠隠滅？
なんかますますＳＦじみてきたな・・・。
さっき考えていた事が現実じみてきた。
そこで俺は少女に質問をする事にした。

「少女、名前は？」

「・・・マナ・アルカナ」

俺がした質問に答えてくれたマナ。
その調子で質問を続ける。

「家族は？」

「いない」

わお、またか・・・なんか俺の助ける少女ってみんなそうだよね。
なんか作為を感じるよ。
しかし、家族がいないのか・・・。
寂しいよな、やっぱり・・・。
俺が頼んだらぬらりひょんなんとかしてくれるかな？
もしだめでも俺が育てればいいか。
今の俺は仕事と金があるし問題ないだろ。
それにエヴァに女の子の友達ができるチャンスだと思うし。

俺は少女に問いかける事にした決めるのはこの子だ。

「私と来るか？」

少したった頃だろうか。
マナは・・・。

こく

頷いた、こうして俺にもう一人の家族が増えた。
名前はマナ・アルカナ。
俺はマナの手を握り歩き始めた。
横目で見たマナは緊張のためか恥ずかしいのか顔が赤い。
今は緊張か恥ずかしいかもしれないが、いつか当たり前になる。
俺達は家族なんだから・・・。

十話　家族が増えました（後書き）

かなりがんばりました。
これからも応援よろしくお願いします。
次回はマナ視点になります。

感想待ってます。

十一話　家族が増えました　2

ーマナ視点ー

私は魔族と人間のハーフだ産まれながらにして魔眼をもっていていわいる化け物
と呼ばれる存在だろう。
両親も居らず私は一人で生きていた。
これからも一人で生きていくのだろう、そんなことを考えつつ私は町に入った。
しかし、町に人の気配がしないもしかしてこの町は捨てられたのか？
私は疑問と好奇心を抱きながら町を見て回る。

ドォン！

私の前方にあった建物が爆発した。
私は近くにある建物に身を隠し様子をうかがう。
しばらくすると爆発で出来た黒煙が消えとある存在が姿を現す。

悪魔

魔法使いが召喚する異形の存在。
そしてその悪魔の近くには杖を持っている男に死体。
魔法使いだろうか？
そしてその死体の後ろには沢山のしたいがある、町の人たちだろうか？
いや、今そんなことを考えてもしかたがない、今はここを離れないと。
私は音を立てないようにその場から離れた。

そして私の前に美しい銀色の髪をしたきれいで同時に恐ろしいと感じる男性が立っていた。
何時現れた？
私はそんな疑問を抱きながら男性を見つめこっそり魔眼を使って正体を探る。
そして私が魔眼で見たのは・・・。

犬

しかしただの犬じゃない、でかく強大で私なんか一瞬で命を刈り取られる。
そんな存在だった。
私は怯えていたがその感情を必死に押さえ悟られないように男性を見続ける。
数分くらいたったぐらいだろうか男性が動いた。
正確には消えた。
私が男性を確認できたのは景色が変わり男性に抱えられていたときだ。
そしてその直後・・・

ドン！

激しい音が聞こえ私は音の方を見るするとそこにはさっき私が見た悪魔がいた。
もしかして、男性は私を助けてくれた？
しかしなぜ？わからない・・・私は男性と違って半端もの魔族にも人間にもなれない存在。
たいていの人間や魔族は私のような存在をさげすむなのに何故？
私はわからなかったこの人が何を考えているのか、だから私は思わず声を漏らしてしまった。

「なんで・・・」

「ん？」

「なんで助けたんだい？」

声に出してしまってはもう遅い、私は覚悟を決め男性に質問をする。
さて、どんな答えがかってくるのだろうか？
まさか私を食料にするとは言わないだろう。

「助けたいと思ったからだ」

「・・・そう」

悪魔を見据え答えたのは、ただ単純に私を助けたいという一言。
どうしてだろうか、男性の言葉にひどく安心感を覚える。
いままでの緊張が緩んだせいだろうか？とても安心している。
その後、男性は悪魔と戦闘いや、あれは戦闘とはいわない。
あれは男性がただ邪魔だったハエを叩き落とすかのように指先に魔力をため
ムチとしてただ払っただけ。
悪魔は真っ二つになって消滅した。
そして私は男性に名前を聞かれ一緒に来ないかと誘われた。
私は頷いた。
私が頷いたのを確認した男性は私の手を握り歩き出した。
う、初めてだがかなり恥ずかしいな。
そういえば男性の名前聞いてなかったな。

「九条　仁」

私が聞こうとしたとき男性が喋った、なんだろう？
私が不思議そうに見ていると・・・。

「私の名だ」

そう一言いって前を見る。
九条　仁・・・か
出身はジャパニーズだろうか？
ふと、仁の顔を見上げる。

トクン

！？

突然胸におかしな感じがした。
これは一体・・・。
私はこのなんともいえない感覚に戸惑いつつ彼と歩き続ける。

十一話　家族が増えました　2（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
これからも応援よろしくお願いします。

※感想待ってます

12話　日本に帰る少し前の話

ー仁視点ー

さて、マナを拾ってから三日たった今日。
俺達は小さな町の宿にお世話になっている。
しかし・・・とても暇だ・・・。
そうこの町には娯楽がないだからとても暇なのだ。
たぶん今日も普通にごろごろしているだけになるだろう。
ちなみにマナは拳銃の練習をしている。
なんでも昔から続けてきた事だから習慣になっているらしい。
場所はこの宿の地下の射撃訓練所。
なんでこの宿にそんなものがあるのかと言うと宿屋の主人の趣味らしい。
始めはマナに誘われてやってみたのだが俺には才能がなくまったくダメだった。
だから俺はこうして窓の外をボーっと見つめ、暇を持て余している。
は～、何かないかな・・・。

「仁、どうしたんだい？」

「別になにもない」

「・・・そうかい」

部屋に帰ってきたマナに聞かれたが、本当に何もないので素直に応えた。
すると俺の答えを聞いたマナは俺の近くにあるイスに座る。

ふむ、マナは小さいし甘えたい年頃なんだな。
暇すぎたせいかそう勝手に解釈をしてマナの頭を撫でる。

「ッ～～～！！」

俺がなでるとマナはビックリしたのか一瞬びくっと体を動かしたが
後は恥ずかしいのか赤い顔を下に向けて
素直に撫でられている。
うん、かわいい・・・。
娘か妹が出来るとこんな感じになるんだろうか？
そういえばエヴァ、今頃大丈夫だろうか？
もう一人の手の掛かる金髪の娘もしくは妹を思い出しつつ
マナの頭を撫で続ける。

ーマナ視点ー

今日も仁はボーっと窓の外を見つめている。
とても絵になっているが、もう少し私にもかまって欲しい。
しかしそんな恥ずかしい事も言えず私は今日も地下の訓練所に向かう。

「お？マナちゃん今日も撃って行くのかい？」

「ああ、する事がないのでね」

訓練所に行くと宿の主人がいつものカウンターに居た。
とても気さくな人物で来るたびにそれなりに話す。

「そうかい、まあ客はただでここを使ってもいいし楽しんでな、
それにしてもマナちゃんもう少し女の子らしい口調にしたほうがい

いと思うぞ？」

「余計なお世話だよ」

本当に余計なお世話だ。
私は少し宿の主人を睨むと彼は軽い感じに「悪い、悪い」と言ってきた。
まったく・・・私だってもう少し女らしい喋り方をしたい。
でも、今までずっとこれで通して来たのだもう直しようもない。
宿の主人と会話を交わした後、私は訓練所で銃の練習をする。
銃を見て初めて銃を握った事を思い出す。
そう、はじめ私が銃を持った理由は生きるため・・・。
そして仁と出会った今の私の理由は・・・。
仁に相応しいパートナーになるため。
彼に追いつきいつか隣で戦えるようになる。
それが今の私の目標・・・。
その目標に向かって今日も私は銃を撃つ。
三時間ぐらい経っただろうか？
私は簡易シャワーを浴びて仁の待つ部屋に戻る。
するとそこには三日前とは変わらず仁は窓の外を眺めている。
私はその姿を見てまるでここには居ない遠くにいると思わせた。
だから私は三日以上前に何かあったのではないかと思い。
彼に質問をする。

「仁、どうしたんだい？」

「別になにもない」

「・・・そうかい」

返ってきた言葉は、なんでもない。
私はその言葉に腹を立てるのではなく寂しいと思った。
まるで、自分は拒絶されてのではないかと。
そして私は確かめるように彼の近くに座る。
もしかしたら気まぐれで話してくれるかもしれない、
そんな淡い期待をのせて。
しかし、彼はさっきと変わらず外を見ている。
やっぱり私はまだそこまで信用されていないのだな。
会ってまだ三日の付き合いだしかたがない。
そう心の中で唱えて離れようと思ったとき。
私の頭に暖かい何かを感じた。
びくっと体を震わせたあと、私はそれを確かめようと視線を上げると・・・。
仁の手が私の頭を優しく撫でていた。
私はそれを確認すると恥ずかしくなり下を向く。
ゆでだこのように赤くなった顔を隠すために。
まったく・・・。
この人はずるいな・・・本当にずるい・・・。
そんなことを考えつつ私はしばらくの間、仁に頭を撫でられ続けた。

十三話　京都に行こう。

ー仁視点ー

あれから俺とマナは日本に向かう飛行機に乗って麻帆良に帰ってきた。

そして現在・・・。

「貴様・・・聞いているのか？」

「ああ」

現在、自宅であるログハウスでエヴァに説教を受けている。

はじめ帰ってきたときは俺に抱きついてきてそのまま俺のわき腹に魔力を込めた

拳を叩き込まれたが別に痛くなかった。

拳の連打が終わったと思ったらエヴァはマナを見て再び連打される。

しかし無駄と解かったのか「バグキャラめ」と一言言って今度はお説教になった。

そして現在に至る。

「それで、この小娘をどうするのだ？」

「学園長に相談して決めるが・・・できることなら私が引き取る」

「ふざけるな！貴様がそういう趣味なのは正直嬉しく思うが、犬や猫とは違うのだぞ！！」

「わかっている」

「いいや、貴様はわかっていない！！もう一度言うぞ大体貴様は普段から・・・・」

この後三時間の説教が続いてようやく開放された俺はぬらりひょんの所にマナを連れて行く。
それにしてもあのぬらりひょんは本当にエロいな・・・。
だっていつも女子中学にいるんだぞ、重度のロリコンとしか思えない。
おっと、考えているうちにもうぬらりひょんがいる学園長室についたか。
俺はマナと中に入りロリコン・・・もといぬらりひょんにマナについて話をした。

「なるほど・・・あいわかった、といいたいところなのじゃが・・・」

「なんだ？」

「マナちゃんを君が引き取るさいに色々と問題が起こる」

「例えば？」

ぬらりひょんは難しそうな顔をして問題の説明をする。
問題は2つ、一つ目は俺やエヴァが近くに居ると魔法先生がマナに手を出す可能性がある。
二つ目は、戸籍・・・なんでも俺とエヴァの一般の戸籍を作ってしまったことでマナの戸籍を足すと
矛盾やおかしい点などが浮上して厄介になるんだとか・・・。
しかし一つ目はどういうことだ？ここの職員はロリコンしかいない

のか！？
まあ、それならしょうがないという事でマナは龍宮神社の神主さんのお世話になる事に決定した。

「マナはそれでいいのか？」

「ああ、仁とは家族になれなくて残念だけど近いし暇さえ見つければ遊びに行くさ」

こうして、マナに最終確認をとった俺とぬらりひょんはマナを龍宮神社にあずける事にし、
龍宮　真名が誕生した。
そしてマナは、来年小学校に通うのだとか・・・。
俺にできる事はもうないな。
そう思いマナを龍宮神社の神主さんにあずけて帰宅した。
あれ？俺旅行に行っていたんじゃなかったっけ？
幼女を連れ帰るためじゃないよね・・・？
楽しむはずの旅行を楽しめていなかったと理解した俺は涙を心で流しつつ
次の旅行を計画するのであった。
次は京都がいいな

ーマナ視点ー

私は仁と共に日本にやってきた、はじめ仁の家に来たとき驚いたのはあの金髪の
女だあの女は何故かきにいらない、仁の家族らしいがあそこまで仁は私のものだと
しつこく連呼してうるさかった、しかし仁の家族だから我慢しつつ

魔眼で探りを入れると
金髪の女は真祖の吸血鬼だった。
まったく仁の周りにはこんな規格外の人物達があるまるのか？とあきれながら
金髪女と仁のやりとりを見守る。
そしてようやく開放された仁と女子中学校にあるという学園長室に行く事になった。
学園長室に仁と入ると後頭部の長い老人のオブジェが飾ってあった。
もしかして誰もいないのか？
しかし、仁はオブジェに話しかける。
仁もしかして疲れで気でも狂ったのかい？そうなら私が一生付きっきりで看病して・・・
だが、残念な事にオブジェは本物だった。
内心舌打ちをして私のことで話が進んでいく。
話の結果、私は龍宮神社というところの神主に預けられるそうだ。
私は仁の家族になりたいと思うがそれは娘や妹じゃない。
もし妻になるさいそんな戸籍は邪魔でしかたがないので正直、龍宮神社に預けられるのは丁度よかったのかもしれない。
さて、明日から金髪との差を広げるか。
そんなことを考えながら私は龍宮神社に神主と向かった。

十三話　京都に行こう。（後書き）

課題が多いです・・・。

※感想待ってます。

十四話　京都で・・・

ー仁視点ー

マナが日本に来てから数ヶ月が経った。
俺は大学に入学してエヴァはまた体の都合で中学生をしつつ警備のバイトをおれとしている。
しかしマナが着てから俺の生活は一変した、何故ならマナは暇を見つけるたびに俺のところに
遊びに来てその度にエヴァと激しいバトルを繰り広げるからだ。
おかげで少し胃が・・・。
でも、いいこともあった、マナが来てからエヴァが甘えるようになったのだ。
一緒に風呂に入ったり同じ布団で寝たりまあ、始めは年齢の事を考え戸惑ったが見た目が十歳の女の子にしか見えないから
別に欲情したりはしなかったから平気だった、むしろ娘を持った父親のような感覚が結構俺は気に入っている。
あと、エヴァに対抗してかマナも一緒に入ったりウチに泊まるなどして充実している。
そして俺にも一つの楽しみができた、それは京都だ。
マナやエヴァのいないとき俺はちょくちょく京都に走って遊びに行く事が多くなった。
始めはイギリスにいけなかったからその代わりのつもりで行ったのだが・・・。

ー数ヶ月前ー

ー仁視点ー

ふう、さすがチートボディまさか京都に走って1時間で着くとは・・・。
そう、俺は現在イギリス旅行が失敗だったため京都に行く事にした。
まあ、地元だし久しぶりに大仏が見たいという事もあって京都にしたのだが・・・。
こんなのあったっけ？
そう、今俺は大仏を見る前に地元で有名だった料亭に昼飯でも食べようと思い来たのだが、見慣れた料亭はなくなっておりでかい山があった。
あれ？もしかしてつぶれた？
一瞬つぶれたかと思ったがそれはおかしいなぜなら料亭だけではなく料亭の周りにあった店や家がなくなって
丸々お山になっているのだから。
それにこの山は何か不思議な力を感じる上、俺の友達であるナギの臭いもわずかだがある。
ちょうどいい久しぶりに会いに行こう。
とりあえず料亭の事は考えてもわからないためナギに会いに行く事にした。
・・・・・・
・・・・・
・・・・
・・・
・
山に入ってしばらく歩いているが何もない、ただ長い石の階段があるだけ。
始めは景色を楽しみながら上れたのだが数十分ぐらいすると飽きてしまいめんどくさくなってきてしまった。
走ろうかと思って足に力を込めると。
「せっちゃーん！逃げてー！！」

「このちゃんを離せ！！」

遠くの方から女の子の声が聞こえた。
またか・・・。
そう思いつつ俺は脚に力を込め、声の方に向かって駆け出した。

ー刹那視点ー

今日ウチはこのちゃんと一緒に森の方で遊びに来ていた。
とても楽しいウチいまとっても幸せや。
竹とんぼで遊んでいるこのちゃんをみていると本当にそう思う。

「それじゃあ、せっちゃん行くえ？」

「うん！」

このちゃんは手に持った竹とんぼをウチに向かって飛ばした。
しかし、竹とんぼは思わぬ方向に飛んでいきってしまった。

「あー、ごめんなせっちゃん、ちょっと取って来るわ」

「いいよ、このちゃんウチが取って来るから」

「あ、せっちゃん」

ウチは竹とんぼの飛んで行ったほうに走り出した。
たしかこの辺に・・・。
キョロキョロと周りを見渡し竹とんぼを探す。

あ！あった！！
ウチは竹とんぼを拾いこのちゃんが待っているところまで走り出す。
「ほら、お嬢様早くこちらに！」
「いやや！はなしてー！！」
「たっく、面倒なガキだなー、おい、もう無理矢理つれていこうぜ？」
「そうだな」
ウチがこのちゃんのところに着いたとき黒服の男二人がこのちゃんの腕を掴み、このちゃんを
連れ去ろうとしていた。
ウチは木に立てかけていた竹刀を持って突撃した。
「せっちゃーん！逃げてー！！」
「このちゃんを離せ！！」
ウチに気づいたこのちゃんが逃げてといったけどウチはいやや！！
何が何でも絶対に助ける！待っててなこのちゃん！！
「っち、面倒な・・・」
このちゃんの腕を掴んでいる男の近くにいた男がウチを殴ろうと拳を繰り出す。
怖いけど逃げへん！ウチはこのちゃんを守るんや！！
衝撃に備え体に力を入れるが予想していた痛みや衝撃は来ない。

恐る恐る目を開けると

「ぐはっ」

「浩二！！くそっ！！！誰だテメーは！？」

気絶している黒服の男と、さっきウチを殴ろうとしていた男が怒鳴っていた。

男はウチの隣を怒鳴っている、ウチは隣を見た、ウチのとなりに居たのは・・・。

「せっちゃん！」

銀色の髪をなびかせ黒服の男を見ている男の人がいた、そしてその男の人に抱えられているこのちゃんはうれしそうにウチに話しかける。

ウチが目を瞑っている間になにがあったん？

それにこの人何者？

十四話　京都で・・・（後書き）

テストが近いです・・・（泣）

十五話　誘拐は犯罪です。

ー仁視点ー

声の近くに到着して様子を伺う俺。
そう、現在俺の目の前では黒い服を着た男二人がいて、一人は
着物を着た女の子を抱え、もう一人は竹刀を持った女の子と
対峙している。
あ～・・・どっからどう見ても誘拐現場だな・・・これ。
そう思って見ていると竹刀を持っている女の子を黒服の男が殴ろう
とする。
危ない！
俺は脚に力を込めてダッシュする。
目標は竹刀の女の子の近く、後抱えられている女の子の救出だ！
俺は抱えている男の近くに行って女の子を回収した後とりあえず殴
っておく。
男は汚い叫び声と共に近くにあった木に激突してぴくぴくしている
もう一人が何か喋っているが無視。
そして殴った俺は竹刀を持って恐らくもう来る事がない男の拳に備
えて目を瞑り衝撃に備えている
少女の隣に立つ。

「せっちゃん！」

俺が救出した女の子が竹刀の女の子に向かって嬉しそうに叫ぶ。
ほう・・・、この子は自分が助かった事より竹刀の女の子が助かっ
た事を喜ぶのか・・・。
俺は自分が抱えている女の子を見て感動する。
いい子だなぁ～。

「おい、無視するんじゃねぇ！そこの銀髪！！よくも俺達の邪魔をしてくれたな！！」

突然聞こえた汚い叫び声、どうやら殴ろうとしていた誘拐犯・・・
いや、ロリコンが
自分達の邪魔をされて怒っているらしい。
俺はとりあえず抱えていた女の子を降ろして男を見据える。

「なんだ、俺とやろうってか？掛かってこ・・・ゴフッ！！」

なんか喚いていたのでとりあえず殴りました。
殴られた男はさっきの男と同じように木まで飛んで行き、ぶつかって気絶した。
さて、これで事件も解決したし警察でも呼ぼうかな・・・。
そう思い俺が男二人を不本意だが担いで歩き出した時・・・。

「待ってください！」

助けた少女に呼び止められ振り向く俺。
お礼かな？と思い呼び止めた少女を見る。

「このちゃんや私を助けてくれてありがとうございます、でもお兄さんは何者なんですか？」

竹刀の女の子が警戒した目で聞いてくる、小さい子なのにしっかりしているな・・・
って、もしかして俺怪しまれてる？
怪しまれる要素はないと思うんだが・・・あるじゃん。
そうだよあんな速さで走る人間いねえよ、少なくとも一般人であん

なに早く走ってなおかつ
パンチ一発で男一人をぶっ飛ばすってどこのスーパーマン？
うん、たしかに怪しさ満点だ・・・。
自分の異常性を思い出し少し暗くなる。

「せっちゃん！せっかくお兄さんが助けてくれたのにそんなこといったらあかんよ！！」

「・・・はっ！？ご、ごめんなさい、このちゃん」

「せっちゃん、ウチに謝ってもしょうがないやろ・・・ほらお兄さんに謝ってお礼いお」

「うん・・・お兄さん助けてくれてありがとうございました・・・
それと変な事言ってすみません」

抱えられていた女の子に怒られて俺にお礼と謝罪をしてくる竹刀の女の子・・・
なんか道端に捨てられた子犬のようにしょげている。
何これ？俺、悪い事してないのになんか凄い罪悪感がするんだけど。
いたたまれなくなった俺は・・・。

「気にするな・・・今度は誘拐されぬようにな」

逃げる事にしました。

「待って！ウチ近衛　木乃香！！お兄さんのお名前は！？」

逃げようとしたら、名前を聞かれた・・・これは応えるべきだろうか？

俺としてはこのまま消えたいんだけど・・・。

「ウチの名前は桜咲　刹那！お兄さんの名前を教えてください！」

その後竹刀の女の子にも聞かれた俺は自分の名前を教え、また会う約束をした後

黒服の男をしばって、手紙を添えて警察前に放置した。

その後も俺はナギの事をすっかり忘れて京都に暇さえ見つければ通うようになった。

刹那やこのかも俺のことを「仁兄、仁兄」いって懐いてくるのでとても嬉しい。

もちろん二人の両親には秘密で・・・。

なぜって？・・・俺は社会的に死にたくないです。

ー刹那視点ー

ウチはたまに仁兄に助けてもらったときの事を思い出す。

あの時、ウチは感じていた・・・仁兄がウチを殴ろうとしていた男を殴ったときに一瞬だけ妖気を仁兄から発せられた事を・・・。

だから、ウチは助けてくれた仁兄を警戒して棘のある質問をしてしもうた。

だけど、ウチが仁兄に質問したときウチは仁兄のつらそうな瞳を見た、ウチは思った。

この瞳は知っている・・・このちゃんに会う前のウチの目や・・・。

これはウチの予想やけど。たぶん仁兄はウチと同じ・・・もしくはそれに近い何かがあったんやと

思った。

その後、仁兄の瞳に見入っておったウチをこのちゃんが叱咤してくれて、仁兄に謝る事ができたんや、

きっとウチだけやったらあのまま謝れず、別れとったんやろうな・・

・このちゃんに感謝や。

ーこのか視点ー

仁兄は本当に優しい、ウチとせっちゃんの約束を守ってわざわざ麻帆良から通ってきてくれる。
でも、なんでお父様や家族には内緒なんやろ？
まあええ、せっちゃんと仁兄と森で遊んだり甘えたり出来ればウチは幸せなんや。
ずっとこのままいれればええな～。
そうや！来年は麻帆良の小学校に通えるようにお父様に頼もう！！
そうすれば仁兄と・・・
えへへへへ。
よし、さっそくせっちゃんとお父様に頼みに行こ！！
ウチはせっちゃんを呼んで一緒にお父様の所に駆け出した。

十五話　誘拐は犯罪です。（後書き）

テストのためしばらくお休みさせていただくことになります。

十六話　十年の思い出と、新しい家族

ー仁視点ー

このちゃん誘拐事件から１０年間、色々あったなぁ。
どうもみなさん、こんにちは。
仁です。
さっき言った通り１０年経ちました。
いやー、時間がすぎるのって早いですね。
ちなみにこの１０年間は自宅警備ではなく学園の警備を続けています。
なんかやめると言う度にぬらりひょんが給料を上げてくれるから
やめれないんだよね。
あと、読者の皆さんにわかりやすくこの１０年間を少しだけ、説明
しよう。

小学校に通うこのかちゃんとアスナちゃんにあったけど俺のことを
覚えていないらしい。
正直悲しかったが、話をしていると昔のように仲良くなった？
表情が、よくわからないけど。
その時、このかちゃんから黒いものを感じたけど、あれはなんだっ
たんだ？

ある日、道を歩いていると女の子が交通事故で怪我をした。
幸い足を軽く捻っただけのようで安心した。
女の子の名前は千雨ちゃん。
俺と話をしている時の目が気になり、何か悩み事が無いかを尋ねる
と、
口から滝のように出てくる愚痴。

簡単にまとめるとこの学校が異常だという事。
うん、たしかに俺も異常だと思う。
校長は自称人類のぬらりひょんだし。
俺が同調すると花を咲かせたような笑顔になり。
その後、また相談していいか？といわれてしまった。
まあ、小学生がストレスを溜めるのはいけないことだと思い、ＯＫをした。
しかし、その現場をマナに見られていたらしく自宅でお説教された。
膝がつらい・・・。

春がもう間近に迫ったある日の事。
俺は眠る事が出来なくて、外を散歩する事にした。
夜で、あったため鉄砕牙を含めた三振りの刀を護身用に持っていく。
風が心地よくとてもいい夜だったのだが、女の子の泣き声が聞こえて気になってしまい泣いている女の子の元へ走る。
俺が着いたのは病院だった。
ほのかに漂う薬品や血の臭いが、勘にさわる。

「・・・残念だけど・・・あやか・・・。」

「うえええええん！！」

「あ、あやか！」

あやかと呼ばれた、金髪の女の子に男の人が説明をしているが、女の子は泣いて走り出してしまう。
男の人も追いかけたいけど、どう喋ったらいいのかわからないようだ。
俺は女の子の後を追いかけ事情を聞かせてもらった。
その時、俺は自分の腰にある天生牙を見る。

試した事は無くダメもとで、天生牙を抜刀する。
この時あやかちゃんがびくっと、怖がるのを見て、少し傷ついた。
とりあえずあやかちゃんが男の人と話していたところに向かって思いっきり振ってみる。
あやかちゃんはこの時、何をしてるのこの人、頭大丈夫？みたいな目で見られた。
はあ、やっぱり何も起きないかと思い。
俺は刀を鞘に戻して、何も言わず立ち去る事にした。
すると何所からか赤ん坊の泣き声が聞こえた。
うわー、これはあやかちゃんつらいだろうなー。
自分の弟は亡くなったのに、このタイミングで赤ちゃんの声を聞くなんて・・・。
遠くに離れたとき、あやかちゃんの声で待っててくださいねーと聞こえた気がした。
もしかして変な事をした俺に対して報復だろうか？
あやかちゃんの臭いは覚えたので臭いが近づいたら逃げよう。
そしてその次の日に雪広のお嬢様が銀髪で着物を着た男を捜していると噂に聞いた。
はじめは俺じゃね？と思ったが俺にお嬢様の知り合いはいない。
それにしてもすごいね、玉の輿じゃんそいつ。
そしてこの日から一週間、知り合いの女性達の目がとてもつらかった。
なんで？

このかちゃんが小学校４年生になったころだろうか？
俺が山に魚を釣りに行ったとき、忍者の格好をした女の子が魚をクナイで取っていた。
正直すごいと思った。

その後、好奇心から話しかけてみたが自分は忍者ではないと言われてしまう。
おそらく知られてはいけなかったんだろう。
忍者は忍ぶものだしね。
俺はとりあえず納得したフリをして釣りをする。
３０分くらい経った頃だろうか、俺は眠くなり頭をかくっと下げてしまった。
その時だろうか、俺の近くの木からスコン！と音がして目が覚める。
自称忍者じゃない少女は、何故か愕いた顔をしている。
おそらく目標の木に命中しなかったのだろう。
その後に勝負を申し込まれた。正直、眠気を覚ますのにはちょうどいいと思い
ＯＫした。
そして、勝負をするときの名乗りで、女の子の名前が長瀬　楓ちゃんとわかった。
勝負が始まると、楓ちゃんは俺に向かってクナイは投げてくるは、鎖鎌を投げてくるは、
はたまた腹に向かってひじを使うは、正直びっくりした。
しかし俺はチートボディ。
楓ちゃんの攻撃をかわし、地面に叩きつける。
もちろん手加減したが、正直、女の子に暴力をふるっていい気分にはならないだろう。
正直、ＯＫしたことを後悔した。
その後、俺が押させつけて動けなくなった楓ちゃんは降参して、まだまだ修行を頑張らなくては
と修行へ向けて大きな気合をいれる。
女の子を痛い目にあわせたのはイヤだったけど、楓ちゃんみたいにやる気が起きるなら
たまにはいいかもしれない。
そして、俺は釣りを満喫し、帰る準備をする際に、楓ちゃんが現れ

俺に将来、仕えたい
と言われた。
たぶん、忍者の卒業試験か何かだろう。たしかハッ〇リくんが似たような事をしていた気がする。
楓ちゃんも目が真剣だし、おそらく俺の考えはだいたい、あっているのだろう。
俺は仕えてもらう事を了承し自宅に帰る。
帰るときに、仁殿から主様になった。
うん、なんか殿様みたいでいいかもしれん。
だが、家にちょくちょく遊びに来るようになり、エヴァやマナ、何故かこのかちゃんや
アスナちゃんにも説教された。

その後も色々あったが、まあそれはまた別の機会に。
おおっといけない。最近の事を説明するのを忘れていた。
2年前、エヴァがぬらりひょんに呼び出され中学に再入学した。
俺としては、今だ交流がある学校の友人がタカミチくんだけというのもいけないと思っていたし
賛成なのだが・・・。
なんか嫌な予感がした。
その数週間後、中国人の少女が家に来てエヴァとなにやら話をしていた。
内容はしらないが、その後日、茶々丸という家族が増えた。
そしてエヴァが二年生に上がった今年の春、京都で刹那ちゃんと話をした帰りに
泣いている女の子を発見し事情を聞く、女の子の名前は高島　りんちゃん。

魔法関係者のようで2年前に両親が仕事で亡くなってしまい。
その後、親戚にたらい回しにされたあげく、つらい生活を送ってきたらしい。
そして我慢の限界が来て逃げてきたはいいが、森で迷子になってしまった。
ああ、親戚達を殺してー・・・。
今でも思い出すと殺意が沸く。
とりあえず、りんちゃんを自宅に連れて行き保護する事にした。
エヴァはまたか！またなのか！！と錯乱したが今回だけは家で預かる。
俺が、かなり本気だと理解したのかエヴァは勝手にしろと言って、別荘に
行ってしまった。
俺は、りんちゃんを連れて学園長のいる女子中学に赴きりんちゃんのことを根回ししてもらった。
その日の警備の仕事のとき、ガングロのガンドル何とかが高島さんの娘に何をする気だと
凄い剣幕で魔法を撃ってきたから、ボコボコにした。
おかげで問題も無くりんは家の子になり、普通の9才の女の子らしい生活を送っている。
それから、数ヶ月経った頃だろうか？りんちゃんも完全に家に馴染んで来てエヴァとマナ達がたまに
遊んでいる姿を見かける。おままごとだろうか？母親は私だ！とか争っている。
そんなに母親の役がいいのだろうか？
ちなみに父親の役は俺らしく、りんは父様と呼んでくる。
とてもうれしい。
それから、また数ヶ月たった頃だろうか？
俺の呼び方は完全に父様になった。
なぜ！？

まあ、イヤではないけどエヴァやマナ達に、名前の後に母様をつけるのはやめて欲しい。
何故なら全員中学生で一人は６００歳の見た目、幼女。
はたから見たら確実に危険人物じゃん！
危険を感じた俺は、なんとか全員を説得に成功し、乗り切った。
そして現在。
今日は休みなので部屋でゴロゴロしている。
は～、極楽極楽。

ぴぴぴぴ！ぴぴぴぴ！

突然、近くに置いてあったケイタイが鳴り響き、モニターにはぬらりひょん。
緊急の仕事だろうか？

『突然ですまんが、教師にならんか？』

ブツ！

電話を無言で切り自室のベットに潜り込む。
一方、女子中学に住むぬらりひょんは・・・。

「わしの扱いひどくない？ねえ？」

一人、嘆いていたそうな。

十六話　十年の思い出と、新しい家族（後書き）

どうも皆さんお久しぶりです。更新が遅れ本当に申し訳ございませんでした。
これからも頑張っていくので応援よろしくお願いします。

ＰＳ；オリジナル小説『まほ×がく』を始めました。
評価や感想をいただければ今後のやる気に繋がるので『まほ×がく』を読んでいただけたら、よろしく願いします。

17話　ぬらりひょんにご注意！　おまけ　あやかの回想　その他

ー仁視点ー

ぬらりひょんの電話がしつこいため、
番号を着信拒否に設定し、データを削除して三時間ぐらいたった頃
だろうか。
ぬらりひょんが我が家にやってきた。
無視しようかと思ったが学校から帰ってきた、エヴァもしくは茶々
丸が、我が家に
入れてしまった。
まったく。面倒な事を・・・。
後で塩を玄関にまかないといかんな・・・。
そんなことを思いつつ、目の前のぬらりひょんと居間にあるソファ
ーに腰を掛け、
話をしている。
若干目が赤く、腫れているような気がするが気のせいだろう。

「仁君、わしの扱い酷くない？」

まったく何を言っているんだ、この老害は・・・。
そんなの、昔からだろう。

「黙れ、小僧」

喋るのもめんどくさいので、テキトーに相手をする。
自分で言っておいてなんだけど、もののけか、なつかしいね。

「いや、たしかに君達から見たら、わしは小僧かもしれんが・・・」

は？何を納得してんの、ぬらりひょん？
あー、そういえば俺って大妖怪だったっけ？
平和すぎてすっかり忘れていた。

「ハハハ！諦めろジジイ。こいつに教師なんて向いていない」

む？何所から聞いていたのかエヴァが話しに割って入ってきた。
たしかに、教員免許をもっていない俺が教師になれるはずないし、
向いていないと思う。
さっさとぬらりひょんには帰ってもらおう。

「エヴァの言う通りだ、だからさっさと帰れ」

「は～、しかたがないの・・・。お主を教師にしないと
ナギの子が苦労するのじゃが・・・。」

俺が帰るように言うと、ぬらりひょんは観念したのか、立ち上がり
玄関に向けて歩き出したのだが、俺の興味を引くためかテキトーな
事を
言ってくる。
は？ついに頭がイカれたか。
ナギに息子なんて居るはずがない、断言できる。
たしかに、アイツは顔はイケメンだが、ロリコンだ。
とても守備範囲の女性を見つけられるわけがない。
きっと今頃、保育園の女子児童を観察しているだろう。
そんな嘘で、俺が騙されると思うな！！

「それがどうした？さっさと帰れ」

ぬらりひょんめ、せっかく対話に応じてやったのに嘘を吐くなんて。
やっぱり、こいつは胡散臭い上に信用できない。
きっと何かあるんだろう。
とりあえず、りん達に警戒するように言おう。

ーぬらりひょん視点ー

仁君に帰れと言われ、これ以上は無理だと、思ったわしは
ひとまず学園に戻る事にした。
それにしても意外だった。彼はナギの友人のはず、ナギの
名前を出せば、応じてくれると思っていたのだが、彼は乗ってこな
かった。
もしかしたら、彼は上層部の思案に気が付いているのかもしれない。
はてはて、どうしたものかの～。

おまけ

ーあやか視点ー

私は十四歳になった今もあの人を探している。
腰まで伸ばした銀の髪に着物を着て、私の前に現れたあの人のこと
を。
幼い頃、私は弟が生まれると聞いて、お父様と病院に向かった。
かなりの時間がたったが、今だ赤ちゃんとお母様は出てこない。
しばらく経って、お医者様がお父様を呼んでお話をしている。
どうしたんだろう？もしかして産まれたのかな？
そんな期待を持っていたのだが、お父様がつらい顔をして私に言っ
てきた。

弟には会えないと。
私は泣き出し一心不乱に走り出した。
走りつかれるとその場でしゃがみこんで思いっきり泣いた。
そんな時だった。
彼が私の目の前に現れたのは。
彼は私が何故泣いているのかと、尋ねてきた。
私は話した。そして私は弟を失ったというショックのせいか彼に理不尽な事を頼んだ。
弟を生き返らせて欲しいと。
今も、時々思い出すがとても恥ずかしい。
普通ならそこで、出来ないと言って私に落ち着かせるか何かをするはずなのだが。
彼は、一本の刀を抜刀した。
私は彼を怒らせて斬られると思って体をビクッと震わせたのだが。
彼は病院を見つめ、刀を振った。
正確には持っていた刀が消えて、いつの間にか振り切った状態になっていたから。
振ったと理解できた。
するとどうだろうか、赤ちゃんの声が聞こえ、お父様が血相をかいて、私のところに来た。

「あやか！！奇跡が起きたぞ！弟に会えるんだ！！」

「ほん・・・と・・・？」

信じられなかった。
まさか本当に生き返らせてくれるなんて・・・。
しばらく、驚いていたのだが、彼にお礼を言おうと振り返る。
しかし、そこにはもう・・・、彼は居なかった。
私は聞こえるかどうか分からなかったが、御礼をしたいから待って

いてほしいと叫んだ。
その日から私は、彼を探した。
始めは、お礼をするつもりだった。だけど年月が過ぎるたびに、私の彼に対する思いは
大きくなっていった。
そう、私は彼に恋をしていたのだと。
幼い頃は気が付いていなかったが、数年前に私は気づいた。
気づいた私は、決心した。
私は彼以外の男とは、結婚しないと。
必ず見つけて、私を好きになってもらおうと。
私は自室の窓の外を見つめ、思いを口にする。

「雪広　あやかは、貴方を必ず見つけます」

おまけ終了

しかし、彼女は知らない。
自分の想い人が近くに居る事を。
彼女は知らない。
自分のライバルと想い人が被っている事を
彼女は知らない。
想い人は彼女のクラスメートの家族だと・・・。

彼女はいつ、出会えるのか・・・。
それは、神のみぞ知る。

17話　ぬらりひょんにご注意！　おまけ　あやかの回想　その他　（後書き）

今回、あやかの回想にするか、視点にするか、かなり悩みましたが、
回想にしました。
次回には野菜が出てくると思います。

アンケートのお知らせ

本日9月6日から9月9日までアンケートを行いたいと思います。
正直、三日くらい前までは、一部の感想に腹を立て、打ち切りにでもしようかと考えました。
でも他の小説を書いているうちに頭も冷え、書く気力を取り戻しました。
ですから、同じ事が起きないように一言、言いたいと思います。
別にココをこうした方がこうで面白いのでは？とかアンチとかは皆やってるし、
他の方向に向けてみれば面白いかもしれませんよ。とかなら別にかまいません。
今後の参考にもなるし、この小説をよくしようと私も考えます。
でも一方的に、なんだ他のアンチ作品と同じかよ、期待はずれだな。みたいな言葉は、創作意欲もなくなるし腹も立ちますので、やめて頂きたいです。
長々と話しましたが、アンケートの内容について、話します。

内容は・・・・

ネギを女の子にするかしないかです！！

頭が冷えた私は考えました。
続きを書き始め、女の子したら面白いのでは？
なんて思ってしまったのです。

女の子なら、仁に惚れて、自分を磨く努力をします。

男なら、りんに惚れて頑張るも、りんの鈍感スキルで涙目に・・・・。
まあ、りんは仁一筋なんで攻略不可能なんですが・・・・。
やり取りはコメディな感じになると思います。

以上です。

予告?

この作品のオコジョは少し変わる予定です。

特別編　りん&カモラジオ

りん「どうも初めまして皆さん！私りんと・・・」

カモ「カモの！」

り・カ「りんカモラジオ！」

り・カ「いえーーー！」

カ「今回は勝手ながら、アンケートの実況やら色々やらせてもらうぜ！！」

り「でも、どうしてこれを始めたのですか？」

カ「いやさ、作者の奴が応援されてテンションが凄い事になってるだろ」

り「うんうん」

カ「それで、またいろんな小説やらを思いつきまくってんだよ」

り「つまりこれも思い付きってことなんですか？」

カ「はっきり言っちまうとそうだな」

り「ふ～ん」

カ「まあ、そんな事は置いといて、現在のアンケート状況が・・・」

ガサゴソ、クンカクンカ、スーハースーハー

カ「これだ！」

り「今、何してたのですか？」

女１９　男９

り「わわ！凄い数です！！」

カ「ネギのアニキよりもアネゴの方が人気が上とは意外だな・・・」

り「はいはい！質問です！」

カ「なんでい、りんの譲ちゃん」

り「ネギ君が男の子の場合と、女の子の場合の違いを教えてください！」

カ「ＯＫ！ネギのアニキの場合だと譲ちゃんに好きになってもらうために沢山の
努力と男を磨いたりするのさ。そのさいオレッチは、アニキにとってのドラえもん
みたいな立場になるらしいぜ！！しかも！その際にも沢山の勘違いが・・・」

り「たとえば何ですか？」

カ「例えばか・・・まあ、いくつか作者が考えているみたいなんだが、採用されるかは分からないぞ？」

り「それでも見たいです！」

カ「そういうと思っていたぜ！じゃん！作者のＰＣから原稿の一部をくすねて来たぜ！！」

り「カモさん、それ泥棒ですよ」

カ「いいじゃねえか、どうせ女になっちまえばお蔵入りなんだから気にしないで行こうぜ！！」

り「う～・・・」

カ「まったく、お譲ちゃんはいい子すぎるのが欠点かもな」

カ「しょうがない、それじゃあ、あらすじみたいに説明するぜ！！

りんの事を好きになったネギ。
ある日りんに贈り物をして、それをきっかけに仲良くしようと思うが。
春休みの為、麻帆良の小学校に行っても会えない・・・。
りんを探しに町をプラプラするが会えない。
しかし、ここで奇跡が起きた。
なんと、自分のクラスの生徒エヴァンジェリンと一緒に歩いているのだ。
声をかけてプレゼントを渡そうとするのだが初恋のネギには、恥ずかしすぎて

なかなか声がかけられない。
そして、そのまま彼女の自宅と思われる、ログハウスに来てしまった。
今日はもう無理だと思い、帰ろうとするのだが・・・
エヴァンジェリンとりんの会話が少しだけ聞こえてきた。

「ーームキムキな男性ーーーー好きです」

ネギは確かに聞いた、初恋の人の口からムキムキの男性が好きと。
ネギの心は決まった。
すぐさま部屋に帰り、ムキムキになるためのトレーニングやプロテインを摂取するように
なった。
しかし・・・このときのりんの言葉は・・・。

「さっき、見かけた沢山のムキムキの男性達より、細い男性の方が好きです」

だった。
ちなみに、この勘違いはエヴァの夢を見た時に分かる。

あと、筋トレを頑張るネギの写真は女子高ではかなりの売り上げを記録したとか・・・。

おまけ。

「そんな僕の勘違いだったなんて・・・うわぁぁぁぁぁん!!」

「まあ、その・・なんだ・・・。りんはある程度たくましい男が好きだぞ?たぶん・・・」

夢を見たことで怒るエヴァはおらず、悲しみに溺れるネギの心のケアをしていた。

みたいな事があるらしいぜ！！」

り「へ～・・・」

カ「あり？反応うすくね？」

り「だって私は仁様のお嫁さんになるんだもん！」

カ「アニキぃぃぃぃぃ！！！がんばってくだせぇぇぇぇ！！」

り「おっと、そろそろ時間ですね。

皆さん！りんカモは明日も更新するので、お楽しみに！！」

り・カ「それじゃあ、皆さん！明日もりんカモ！！」

カ「アニキぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！！！！」

りんカモの重大　報告！！

皆さんの反応によっては、りんカモラジオは後書きになるかもしれません！！
後、アンケートが終了した時、ナギの杖を持つ少年は、修正されます。
ふふふふふ！皆さんのおかげで色々思いついてキターーーー！！
しばらくはプロットを書く作業になりますがお楽しみに！
後、おまけですが作者がストレス発散の為に書いていた小説があります。
アンケート終了までりんカモと、小説「トライピースに入ります」を読んで待っていただけると嬉しいです。

最後になりますが応援の言葉を本当にありがとうございました。

特別編2　りん&カモ　ラ　ジ　オ

り・カ「皆さん！りんカモ！はっじまるよーーーー！！」

カ「さてさて！今日のアンケート状況は・・・」

ガサゴソ、ガサゴソ・・・「ハッ！？」しくしく、ガサゴソ・・・。

カ「コレだーー！！」

り「何かあったんですか？」

男12　女18

り「わ～、女の子が減っています、どうしてですか？」

カ「ああ、何でも黒猫さんって人の意見を見て、やっぱ男にするって人がいたのに気づいたんだよ」

り「へ～」

カ「さて、このりんカモラジオで重大発表があるんだぜ！！」

り「なんですか？」

カ「実はな『魔法の世界に来た犬』がもう一つ作られる事になったんだよ！！」

り「本当ですか！？でもどうして！？」

カ「ほら、作者やる気出しちゃっただろ？それで、エヴァが吸血鬼にされたあたりで
仁の旦那をとばしたら面白くない？って事でこの小説とはちがう勘違いも起こりまくるらしいんだ」

り「たしかに面白そうですね！」

カ「でも、問題が一つあるんだよ」

り「問題ってなんですか？」

カ「同じ主人公で同じ設定で読者の皆さんが楽しんでいただけるかだよ！」

り「確かに重要です！！」

カ「そこで！またアンケートだ！！」

り「またですか！？」

1、主人公設定を同じにして６００年前に飛ばす。（もちろん勘違いは魔法の世界に来た犬とはまたちがいます。ハーレムは変わらない）邪見が出ます。

2、主人公設定が死神になり見た目が朽木白哉もしくは日番谷冬獅郎（青年ｂｒ）
ホロウ化や全ての死神の斬魂刀が使えるせいですごい勘違いが・・・

！？
もしくはドラゴンボールキャラ？
3、べつにいいや
カ「以上でい！」
り「は～すごいね」
カ「アンケートに答える場合は番号でよろしく！！」
り「えっと・・・よろしくお願いしましゅ！！」
カ「・・・」
り「・・・」
カ「まあ、あれだ・・・、よくあるから気にしない方がいいぜ？」
り「ぐす・・」
カ「アンケートは、二つとも明日が最後！頼んだぜ！！」
り「うう・・・、皆さん明日もりんカモよろしくね？」（涙目）
邪見「わしの出番はまだかーーーーー！！！」
カ「誰！？」

特別編　りん&カモラジオ！！

り・カ「皆さん！今日もりんカモ！始まりまーーーす！！！！」

カ「いやー、今日でこの特別編も最後かー・・・・」

り「そうですねー・・・」

カ「だがしかし！今日は特別ゲストが来てるんだぜ！！！」

り「本当ですか！？もしかして仁さ・・・」

カ「特別ゲスト！ミスターーーーー！！！！邪見ーーーーー！！！！」

邪見「みなさーん！殺生丸様のサンドバック・金魚のフンこと邪険様だ！
貴様らひかえよろーーー！！！」

り「邪見様！？なぜ！？」

カ「いやぁ、昨日居酒屋で仲良くなってつれてきちまった」

邪「いやー、オコジョとはいい酒を飲んだ。
わしの愚痴を聞いてくれるのはお前だけだ・・・」

カ「苦労してるな・・・」

り「そんな事よりアンケート状況をどうぞ！！」

男２０　女２０

１番　１０

２番　８

り「すごいです！男と女が拮抗しています！！あと、三番ですが投票数が少ない為
表示していません」

邪「カモあの時、殺生丸様はわしに仰った！「伴はおまえだけでよい・・・」と！
どんなに嬉しかった事か！！」

カ「は～・・・」

り「まだ、喋っていたんですね・・・」

邪「だいたい、普段から殺生丸様はわしに冷たすぎる！少しでいいから
りんのうような接し方をして欲しい！！」

カ「お前さんじゃー・・・無理だろ」

邪「ぐびぐび！ぷはーーー！ひっく！それに殺生丸様はなんでりんを拾ったのやら・・・、
ひっく！」

カ「あーあ、本番中に焼酎を一気飲みしちゃって・・・」

邪「もしかして殺生丸様はロリコン、ヒック！なのではと思うのだが、ヒック！
どう思う？」

カ「うーん、確かに旦那はロリコンだと思う。もしかしたらあの謎のもこもこ
の中に幼女関係のエロほ・・・ん・・・が・・・」

邪「うひゃひゃひゃひゃ！それ最高！！よし今度から殺生丸様の事はロリペド丸様と呼ぼう！！・・・？カモどうした？そんなに震えて」
（酔っています）

カ「・・・」

無言で後ろを指すカモ。

邪「ヒック！後ろ・・・」（酔っています）

クル

邪「！？」（酔いがさめました♪）

殺生丸（原作の人）「・・・邪見」

邪「いやー・・・殺生丸様はかっこよく、素敵な大妖怪であらせられれれ！」

ぎりぎり！握り潰さんばかりに頭を握られる音。

カ「じゃあ、おいらもこのへんで・・・」

ダッ！逃げ出す音

ガシ！捕まる音

カ「ヒィーーーー！！！！！アニキィィィィイ！！！！！！」

り「あ、殺生丸様！」

殺「りん、大人しくしていろ」

り「はい！」

邪「はい！ではなーーい！！わしだけでも助けんか！！いや、助けてください！！」

カ「てめー！一人だけ助かる気か！？」

殺「貴様ら・・・、今日は少々虫の居所が悪い。手加減はしてやれんぞ」

邪・カ「イヤーーーーーーー！！」

ズルズル　殺生丸に引きづられて行く音。

※ちなみに殺生丸のモコモコは、たてがみらしいよ。

り「山の中、森の中～
　風の中、夢の中～
　殺生丸さま、どこにいる～
　邪見さまを、したがえて～

わたしはひとりで待ちましょう～
殺生丸さまお戻りを～♪」

り「ドナドナの代わりに歌ってみました！さて！皆さん！！
今日で投票は最後です！もしや貴方の一票で全てが決まるかもしれません！！
決まらなかった場合、作者が友人に投票を求めます！！」

り「さて！もしかしたらりんカモが後書きになる可能性もありますし次回予告をやってみたいと
思います！やってみたかったんですよね！

さて！次回は・・・

『カモが抹殺されてラジオの主役はりんの物に！』

『邪見処刑で殺生丸様と二人っきりに！？（ドキドキ）』

次回もりんカモ！！」

※ウソです。

注意事項・今回出てきた殺生丸は本編よりも原作に近づけて見ましたが。
本編ではりんカモのようなやりとりはたぶんないと思います。
ま、りんカモだけの殺生丸（仁ではない）とのやりとりですね！

※投票は終了しました。

18話　ナギの杖を持つ少女

ー仁視点ー

今日もいつもと同じように、茶々丸に起こしてもらい、三人娘を見送る。

「行ってまいります。仁様」

「行ってくる」

「行ってきまーす！」

「ああ」

玄関でお辞儀をしてから、学校に向かう茶々丸と、まるでどこかの社長のように出て行くエヴァ。

そして、元気よくランドセルを背に走っていく、りん。

さて、今日は仕事がないしグダグダする・・・。

ん？

本当に僅かだが、ナギの臭いを感じた。

来ているのか？

まあ、暇だし、久しぶりに会いに行くか。

寝巻きから、着物に着替えて外に出る。

それにしても、アイツは何をしに来たんだ？

もしかして、世界中の幼女に飽きて、エヴァに会いに着たんじゃないだろうか？

なんせ奴は、ロリコンだ！十五年前もエヴァといちゃいちゃしていたしな！

ん？なんか臭いが女子中エリアに入ったような・・・。
俺は意識を鼻に集中し正確に居場所を探す。
二度ほど試したが、奴は女子中エリアに侵入した。
ヤツめ！今度は中学生を狙い始めたか！！
俺は変態を止めるために、高速で屋根から屋根へ飛び、駆け抜ける。
そして、数分ほど経つと女子中エリアに入って、臭いを辿る。
すると・・・。

「ちこくー！！」

「早くしろって！遅れるぞ！！」

「あわわわ！？」

麻帆良名物、登校ラッシュ！
が目の前に繰り広げられていた。
いやはや、ここの学生達は将来、大丈夫なのか？
この光景を見ていると、そのような事を考えてしまう。
ん？あれは・・・。

「うう、どうしよう。この人たちについていけば大丈夫かな？」

集団の中で、目立つ赤い髪でロングヘヤーの少女。
それにあの杖は・・・。
そう、少女の背中にある杖は十五年前ナギが持っていたものにそっくりで
そこから、ナギの臭いもした。
おそらく、ナギの親戚だろう。
本人ではなかった事に喜ぶべきか、残念と思うべきか、そんな複雑な気分に

なりつつ、困っている少女の近くまで歩いていく。

「どうかしたのか？」

「え？」

突然声をかけたのがいけなかったのか、少女は軽く声を漏らし、俺を見る。

しかし、俺を見たとたん、俺の顔をじーっと見始めた。

そんなに変な顔をしているのだろうか？

鏡で見たときは美形すぎるだろと、思ってしまったが、

この子は外国人のようだし、もしかしたらこの少女から見た、俺の顔はおかしなものなのだろうか？

正直とても気になる。

「私の顔に何か付いているのか？」

「い、いえ！とても綺麗な顔だと・・・って！そうではなくてえっと！えっと！・・・」

ふむ、少女の素振りから、俺はブサイクに見えていないようだ。

それにしても、落ち着きが無い子だ・・・。

もしかして、人見知りなのか？

いや、俺が原因か。

「落ち着け」

「は・・・はい」

それから少し経つと、少女は落ち着いたのか。

俺に話しかけてきた。

「先程は、すみませんでした。
それで、聞きたい事があるんですけどいいですか？」

「かまわん」

「ありがとうございます！それでは・・・」

うん、今時珍しいほど素直な少女だ。
もしかしたら、りんと気が合う、かもしれない。
それから、少女の話を聴く俺なのだが・・・。

「なるほど・・・麻帆良で教師か・・・」

「はい、それで女子中等部に行きたいのですが・・・道が分からなくて」

「わかった、私が案内しよう」

「本当ですか！？ありがとうございます！！」

嬉しそうに頭を下げる少女だが・・・。
この子、見た目が十歳ぐらいなのに大丈夫なのか？
労働基準法にケンカ売ってんじゃないのだろうか？
あのぬらりひょんは・・・。
りん達の事は感謝しているが、やはり胡散臭い上に信用が出来ないな。

「行くぞ」

「はい！」

そういって、少女と歩いていく。
あれ？そういえば名前を聞いてないな。
まあ、後で聞けばいいか。

「ーーーー・・・ワン！！！」

ん？なんか近くで最近はまったく聞かなくなった懐かしい声が・・・・。

俺が、横を向くと・・・・。

「はう！仁さん！！？なんでここに！？」

「仁兄、久しぶり」

「久しぶりだな」

アスナちゃんと木乃香ちゃんが居た。
それよりもアスナちゃん。
俺がここに居たらおかしいかい？
あ、女子中等部に近いエリアだし当然か。

19話　三人が怖い。

ー仁視点ー

さて、少女ネギちゃんと木乃香ちゃんにアスナちゃんの三人娘を引き連れて、ぬらりひょんの間に来た。
中に入ると、ぬらりひょんが高そうな机に座って、碇指令のようなポーズをとっている。
なにしてんの？

「ほっほっほ、よー来たの・・・。
おや？仁君はどうしたんじゃ？
おお！もしやあの話を・・・」

「黙れ」

「な、わけないか・・・」

明らかに落胆するぬらりひょん。
まったく、さっさと帰ればよかった。

「あのー・・・？」

「ん？おお、すまんのネギちゃん。
たしか修行の話じゃったの」

「はい」

おいおい、ぬらりひょん修行ってなんだ？

少女が教師をやってどんな修行になるんだ？

「まずは、三月まで教育実習をしてもらうぞい」

「ちょっと待ってください！子供に先生をやらせて大丈夫なんですか！？」

おお！アスナちゃんがぬらりひょんに正論を・・・！
昔と比べると本当に元気になったね、お兄さん嬉しいよ。
妹、もしくは娘の成長を喜ぶ父もしくは兄の心境になりつつ
アスナちゃんを見守る。

「ネギちゃん、おそらくこの修行は大変なものになる。
それでもやるかの？」

おいおい、図星を突かれて無視してるよ！
もう、抹殺した方がよくね？

「は、はい。やります！やらせてください！」

「それでは、ネギ先生。これから来る指導員のしずな先生のいう事に従って
教室で授業をしてもらおうかの」

「はい！」

「うむ」

うむ、じゃねえよ、クソジジイ。
大丈夫かな、ネギちゃん・・・。

正直かなり心配だ。

「ちなみにアスナちゃんとこのかのクラスだから、二人ともよろしくの。
おお！一つ忘れておったわい！！ネギちゃんの住所なんじゃがまだ決まって
おらんから、アスナちゃん達の部屋に泊めて、あげてくれんかの？」

「まあ、別にいいですけど・・・」

「ウチもええよー」

なんか、俺空気じゃね？とんとん拍子で話が進んで行く中、
俺一人だけが取り残されている。
さみしい・・・。

「失礼します」

「お、どうやらしずな先生が来たようじゃな」

お、しずなさんだ。
魔法関係ではない指導員の先生でよく話をする。
その際に一緒に喫茶店に行ったり買い物をしたりしたのはいい思い出だ。

「あら、仁さん。どうしてここに？」

「ネギの案内ついでだ」

「そうでしたの、あの・・・今度また喫茶店でも・・・」

「うおっほん！先生！そろそろ急がないと遅刻ですよ！」

「アスナの言う通り、はよう行きましょ」

「「「・・・」」」

見詰め合う三人。
なんだろう、三人とも笑顔のはずなのに、とても恐ろしく感じる。
それから、しばらくして、怯えるネギちゃんを連れ、４人で教室に向かって行った。
さて、俺も帰るか・・・。

19話　三人が怖い。（後書き）

り・カ「どうも皆さん、りんカモ！」

り「いやー、いよいよ物語が始まりましたね。」

カ「そうだねー、楽しみだねー・・・」

り「どうしたんですか？かなり気が抜けていますけど・・・」

カ「だって！オレッチの出番かなり後になるんだぜ！
ふてくされたくもなる！気も抜けたくなる！」

り「私だって、しばらくはあまり出番がないんですよ！
一人でふてくされないでください！」

り・カ「・・・」

り「気を取り直して次回予告します」

カ「そうだな」

り「次回、ドラえもんの世界に転生！？
仁はのび太を救えるか？」

カ「譲ちゃん！原稿が違うぞ！！」

り「あ・・・」

次回もお楽しみに。

２０話　魔法少女千雨ちゃん　になるかは、作者の気分しだい

ー仁視点ー

ぬらりひょんの間から自宅に帰って、夕方になった現在。
千雨ちゃんがやって来た。
また、何かあったようだ、はてさて、今日はどんな事があったのか・・・。
お茶と茶菓子を持って千雨ちゃんがいるソファーに行く。

「あ、ありがと。仁さん」

「気にしなくていい、それで今日は何があった」

「実は・・・」

ふむ、千雨ちゃんの話によると、自分のクラスの担任が子供になってしまった
らしい。
うむ、ぶっちゃけネギちゃんの事だろう。
まあ、たしかに異常としか言いようが無いよね。

「異常だな」

「そうなんだよ！異常なんだよ！！しかも教室に入って早々、黒板消しを頭上に浮かべたり
神楽坂の服を飛ばすし・・・」

おいおい、ネギちゃん魔法使いなんだからもう少し気を使おうよ・・

・。

少し、呆れつつお茶を飲む。

「あのさ、それで仁さんに聞きたい事があるんだ」

「何だ？」

本当になんだろう？今更、聞きたい事って。
でも、千雨ちゃんの顔は真剣そのものだ、何か重要な事を聞いてくるに違いない。

「仁さん、あんた魔法使いじゃないのか？」

「俺は・・・「千雨、その質問の答えを聞くと戻れなくなるぞ」
およ？何時の間に帰ってきたんだい？
我が家の三姉妹は話に夢中になってて気が付かなかったよ。

「どういう事だ？」

「仁、悪いがりんを連れて二階に行け」

「解かった、りん行くぞ」

「はーい！」

「では、私も・・・」

「茶々丸は此処に居ろ！」

「・・・はい」

りんと茶々丸の三人で二階に行こうとしたんだが、茶々丸は
エヴァに残れと言われ、残念そうにしている。
今度、埋め合わせするから耐えてくれ。
しかし、思わず真剣な顔をする、エヴァの言う事を聞いてしまった。
おそらく、魔法関係について話すのだろう。
まあ、魔法に関しては俺は素人だし、要約すると・・。
仁は邪魔だから、りんと一緒に遊んでいろって事なんだろうな。
うん、寂しくなんか無いぞ！すこし、空しいだけさ！！
え？変わらないって？はい、そうですね・・・。

ー千雨視点ー

せっかく仁さんの正体を聞けると思ったのに、この幼女め！
心の中で目の前にふんぞり返っている幼女を見て、罵倒する。

「さっきの質問だが・・・。答えを聞けば貴様は日常に戻れなくなる
確実に貴様の嫌いな、非日常がお前を襲ってくるだろう」

「マジかよ・・・」

この回答が、他の奴だったら、私は中二病の痛い奴と思って
笑っていただろうが、相手はエヴァンジェリンだ。
仁さんに好意を寄せていて、不器用にも言い寄っている私の敵。
学校では話さないが、仁さんに悩みを相談している時、私達二人の
空間を
ぶち壊す、ムカツク幼女。
しかしだ、コイツの言動や会話は、見た目よりも大人で下手をしたら
私よりも上だと思ってしまった時もある。

そんな、エヴァンジェリンの言葉だ、おそらく本当なのだろう。
そして、その言葉と同時に理解した。
魔法はあると・・・。
昔からあった、魔法おっさんの話や魔法少女や魔法シスターの話も
本当・・・
で、思った通りあの子供先生も・・・。
はあ、なんか頭が痛くなってきた。
思わず、両手で頭を抱えてしまう。

「で、貴様はどこで気が付いた？まあ、想像はつくがな・・・」

「ああ、子供先生だよ」

「やっぱりか・・・」

だって、なんの細工もしていない黒板消しが空中を浮かんだんだ。
この学校の異常さや、噂を考えれば、簡単に辿り着けた。
そして、辿り着いた私は思った。
十年経っているのに、姿が変わらない仁さんも何か関係しているの
では？
と。
それで、此処に来て仁さんに直接確かめようと来たのだが・・・。

「ここで、聞かなければ、見逃してやる。
もし聞くのなら覚悟しろ」

何でこうなった！？

２０話　魔法少女千雨ちゃん　になるかは、作者の気分しだい（後書き）

り・カ「皆さん、久しぶりんカモ！」

り「今回は感想コーナーをやるよ！」

カ「おお！なんかラジオっぽい！」

り「それじゃあ、読みます！

ペンネーム、ユッキーさん。

ぬらりひょんで思ったのですが、ぬら孫と殺生丸（転生者）の小説もできれば読んでみたいので時間があれば書いてくださいｍ（｜｜）ｍとの事」

カ「感想と言うか要望だな」

り「まあ、きっと作者のテンションが高い時に書いてくれるよ！

それまで、待っててね！」

カ「それじゃあ、次はオレッチが読むぜ！」

り「わーーー」ぱちぱち

カ「ペンネーム　ｏｍｅｇａｚｅｒｏさん

邪見……（ホロリ

まだまだ『りんカモラジオ』を続けてほしいですね！　次回予告とかで使ったり

次回も楽しみに待ってます。」

り・カ「・・・・・」

り・カ「ありがどーーーーー！！！！！」

カ「おっと、時間が来ちまったぜ！」

り「それじゃあ、次回予告！千雨の記憶＋
りんの仁様ラブラブ大作戦！よろしくお願いします！」

カ「お譲ちゃん原稿が・・・ってタイトルは違うが多少は合ってるのか」

り・カ「次回もりんカモよろしくね！！」

感想・評価をお待ちしております。

２１話　疲れた・・・。　Ｂｙエヴァ

ー千雨視点ー

１０年前、私は麻帆良が異常である事を教室の友人達に教えた。
しかし・・・。
返ってきた答えは　　うそつき
そう、周りの人間は誰一人、麻帆良で起こる全ての異常を異常と
認識していなかったのだ。
幼い私は、うそをついていないのにうそつきと呼ばれ、傷つき、泣
きながら
自宅に帰るのだが車にひかれそうになり、足を捻って転んでしまっ
た。
本当にあの時はついていなかった。
そして、幼い私の目の前に現れたのが・・・。
九条　仁
銀の髪に着物を着た青年。
彼は私が車に接触しそうだったのを見ていたのか、私の所に来て。
怪我は無いか聞いてきた。
私は意地をはって、「ない」と答えた。
仁さんは一言「そうか」と答え私の目を見て、幼い私の心を救った
一言を言う。
何か悩み事が無いか
そう、そのたった一言。
その一言を聞いた、私は口からマシンガンのように話をした。
私は、あの一言のおかげで、嫌な思いを溜め込むことなく、普通に
暮らせていると思っている。
もし、あそこで仁さんに出会わなかったらどうなっていただろうか？

変なものを心に溜め込み、笑う事なんて出来なくなっていたのかもしれない、
両親を悲しませるような事をしていたかもしれない。
本当に仁さんには、感謝している。
それ以来、私は仁さんに時々口を聞いてもらったり世間話をするようになった。

そして、新しい先生だという異常の塊の少女が我がクラスに来た。
先生である事だけでも異常だというのに、黒板消しを宙に浮かせたのだ！
種も仕掛けも無い黒板消しを！！
それから神楽坂の制服が消し飛んだりと色々あった。
そして、例のごとく仁さんの自宅に向かうときにふと思った。
仁さんの正体を聞けるチャンスではないかと。
かれこれ十年の付き合いだが、彼にも異常がある。
そう、歳をとっていないのだ、おかげで仁さんはサイヤ人なのではないかと思った事が数度ある。
昔も今もあの姿のまま、疑問には思っていたが今までは聞くチャンスがなかった。
しかし、現在の私はチャンスが出来た。
子供先生と仁さんは何者だと・・・。
これでうまくいけば仁さんとの距離もと、思っていたのだが・・・・

ー現在ー

「ここで、聞かなければ、見逃してやる。
もし聞くのなら覚悟しろ」

何でこうなった！？
私の予想では、仁さんの正体を知って、仁さんを受け入れていい感じになるはずだったのに！！
だが！まだ可能性が０になったわけではない。
今はとりあえずエヴァンジェリンの正体や魔法の事だけを聞いて、後で個人的に仁さんに正体を聞けばいいだけ、ノープログレムだ！！

ーエヴァ視点ー

「ここに居る限り、逃げられないんだ。話を聞かせてくれ」

そんな事を言っている長谷川　千雨だが、私には分かっている。
こいつは魔法のことを知って、仁に急接近する気だ。
ちっ！面倒な奴にバレた！！
ネギの小娘、覚えていろよ！！

数時間後

「だから、こっちは危険だから忘れて帰れといっているだろうが！！
この、メガネが！！」

「うるせぇ！さっきから「覚悟がある」って言ってるだろうが！！
金髪幼女！！」

時計をチラリと見る。
くそ！あれから数時間経っているではないか！
始めはどれくらい恐ろしい事がその身に降りかかるが、例え話で脅しに脅したのだが。

それでも聞くと、意思を曲げずに魔法の事を聞こうとしてくる。
そのせいで、私もついにキレて今のような怒鳴りあいになってしまった。

「ハァ・・・ハァ・・・、いい加減・・・にあきらめたらどうだ・・・？」

「そっちこそ・・・ハァ、話したら・・・どうだ・・・？」

お互いにフラフラしながら、やり取りをつづけるが数分後に仁とりんが降りて来て、このやり取りが終了となった。

一言だけ言わせて貰おう。

疲れた・・・。

２１話　疲れた・・・。　ＢＹエヴァ（後書き）

り・カ「本当にひさしぶりん・かも！！」

り「皆さん！お久しぶりです！」

カ「本当だよなぁ」

り「まぁ　作者さんが試験期間だししょうがないよね？」

カ「まあな、この間寝不足で机に向かって寝ていたしな」

り「そんなわけで、皆さん冬休みまで更新が遅いと思いますがよろしく
お願いします！」

カ「それじゃあ、りんの譲ちゃん！予告よろしく！！」

り「はい！　次回の魔法中学生リリカル千雨は、
魔法中学生千雨の　目の前に黒いマントをなびかせる金髪幼女が現
れる！
敵か！？それとも味方か！？　第４４４話　「ゆずれない願い」
次回もリリカルマジカル・・・」

千雨「するか！！！」

感想・評価をおまちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6987s/

魔法の世界に来た犬

2011年11月30日14時49分発行